

目 次

聖訓摘要	……………	本	多	生
開目鈔講話(承前)	……………	小	林	郎
本尊曼陀羅の意義(四)	……………	河	合	明
經濟と信仰	……………	上	田	卯
靖國の英靈を讃ふ	……………	本	郷	郎
叡山の聖蹟	……………	磯	常	
記 事	……………	部	次	
	……………	滿		
	……………	事		

○本部圓報 ○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收

第十四年六月號

14/10-183



統

一

財團
法人
統

團發行

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ 第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ精進 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ 寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ邁スル教學ノ特色ヲ永久ニ保持セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

本多日生

右衛門太夫殿御返事

窪尼御前御返事

これには孰れも抽出する所がありません。

出家功德御書

我身は天よりもならず、地よりも出でず、父母の肉身を分けたる身也、我身を損するは父母の身を損する也、此の道理を辨へて親の命に随ふを孝行と云ひ、親の命に背くを不孝と申すなり(繪圖道文) これは出家の功德に就いて書かれた御文章で、或る人が出家して居るのを還俗しかけたから、親が出家にしようと思つて居たのに、今日親が歿なつたからといつて還俗するのは、それは大變親不孝である。元來この身は自分のものと思ふけれども、人間の身は天から降つて來たものでもなければ、地から湧い

て出たものでもない、親の身を分けて貰つて居るのであるから、よく考へると、自分の身とはいふけれども、親の身ぢや、この事を餘程考へなければいかぬ、今日は個人主義といふやうな事を言つて、「親は別に俺が産んで呉れとも言はぬのに勝手に産んで置いて、子供の時分には散々おもちやにして置いて、年取つてから養へナンといふ、そんな勝手な事があるカイ」斯ういふやうな事を言つて、大分調子が變つて來て居りますけれども、それは宜くないと思ひます。何も親が世話をして呉れないでも、自分のこの身、それを與へて呉れて居るのである、この舌によつて牡丹餅を食つてうまいと感ずる、この舌といふものは親が呉れて居る、自分の舌ぢやない、この全身みな親から與へられた所のものである。若しさうでないとなれば、不具に産んで呉れたらどうする、そこを考へなければならぬ、それを完全に産んで貰つて居る、さうして子供の時分から、親は、斯うもしたら胎の子供に悪い影響があるだらうといふので、いろ／＼氣苦勞をして居る、腹が立つても懷妊中に腹を立てれば、痲瘋持ちの子になるだらうといふので、痲瘋を起さぬやうにとが、いろ／＼親が子を思ふ精神に依つて今の自分が出來て居るのである。だから子供を捨てるやうな親でも、親の恩といふものは餘程大事なものだと思ふ。私は彼の雲井龍雄が捨兒の問題に就いて詠んだ所の有名な詩が非常にいゝと思ひます、彼の友人等が或る時、捨兒をするやうな親といふものは鬼だといつて嘲けて居つた、「さうだな、子供を捨てるやうな親は鬼だな」と皆が言つて居つた、その時に雲井は一人反對をした、それは君等が間違つて居る、兒を捨てる親と雖も

決して鬼ではないといつて、彼の詩を作つた、

斯身飢ゆれば斯兒育たず、
斯兒棄ざれば斯身飢ゆ、

捨るが是耶捨ざるが非耶、
人間恩愛此心に迷ふ、

哀愛禁ぜず無情の涙、

實に讀んでも涙の出るやうな詩であります、これは自分の子供を捨てることを言ふたのではない、捨兒の問題に就いて彼が斯ういふ詩を詠んだ譯である。その詩が非常に上手であつたから讀んで感激するのであるが、私は雲井の説に賛成する、親はどんなに粗末に子を育てても、その慈愛——無形の慈愛といふものは非常なものである。子を捨てたからといつても、モウ捨てた子だからどうなつても構はぬといふやうな考へは決して起さない、「どうか善い人が拾つて行つて呉れるやうに」といふので、捨兒をした親でも、石燈籠の影に隠れて子供の前途を思つて居るといふ、さうして若し酔ばらひでも來て拾つて行かうとすれば、「あゝあんな奴に拾はれては困るナ」と思つて氣を揉むといふ。さういふ慈愛を籠めて我がこの肉身といふものは與へられたのであるから、これはやはり永久に親の恩といふ事を重くことにして行かなければならぬ、それが判らぬやうになれば、孝は百行の本といふのであるから、親の恩くらゐ適切な又深いものが判らぬやうになれば、モウ他は何にも判るまい、親の世話になつて居つても、「それは親が勝手に世話したのぢや」といふ事になれば、人の世話になつても「それは彼奴が物好きでやつ

四
「たんぢや」といふやうな譯で、一切の道德といふものが壊れてしまふ、先づ親子の關係に於ての道德といふものを十分に心得て、そこから、君臣の關係も父子の如しといふことになつて、すべて人情といふものが壊れてしまひはしないかと思ふ。さういふ事から考へて、日蓮聖人は、「我が身は天よりもふらず、地よりも出でず、父母の肉身を分けたる身なり」と言はれたことは、餘程よく味うて見なければならぬ、さう思はぬ人がなか／＼多い。私共も初めはさう考へて居なかつた、これは自分のからだぢやと思ひ居つたけれども、この御文章を讀むに及んで、成程牡丹餅を食べてうまいといふのは、自分の舌でわかるのだけれども、斯ういふ舌は親が呉れたのだ、牡丹餅を食へばうまい、林檎は食へばうまいといふ舌は親が呉れたのだと思ふて、私は親に感謝する意味がよく判つたのであります。

上野殿御返事

この中には御紹介する所がない。

秋元御書

器に四の失あり、一には覆と申してうつぶけるなり、又はくつがへす、又は蓋をおほふなり、二に

は漏と申して水もるなり、三には汗と申してけがれたるなり、水淨けれども糞の入りたる器の水をば用ふる事なし、四には雑なり、飯に或は糞、或は石、或は沙、或は土などを雜へぬれば人食ふ事なし。器は我等が身心を表す、我等が心は器の如し、口も器、耳も器なり。(縮刷遺文錄)

これは有名な御書で、器について日蓮聖人が御教訓をなさつたのであります。器には四つの失があらば人これを用ふることなしで、その四つの失とは覆、漏、汗、雑といふのであります。「覆」といへばひつくり返つて居ることになり、「覆」と訓めばおほふて居ることになりますから、例へば茶碗がさかさまになつて居れば「覆」である、それからこれに蓋がしてあれば「覆」である、茶碗がさかさまになつて居れば、佛様からいくら清い結構な法水を與へられても、皆外へこぼれてしまつて一つも茶碗の内に受取することは出来ない、又これに蓋がしてあつても受取ることが出来ないから、器がひつくり返るとか、蓋がしてあるといふ事では、用をなさない譯である、酒にして見たならば「オイ姐さん一バイ酌いで呉れ」といふのに、盃をさかさまにして出したり、蓋をして出したり、決してそんな馬鹿な事をしはせぬ。所が信心の方には、それと同じやうな愚な事をやる者が澤山ある。それは何かといふと、教を聽かない所の人間といふものは、盃に蓋をして居るのである。教といふものを聽かないから、その内に本當の清い信仰の水といふものが運入らない。或は親切な人があつて教を聽かしてやらうといふのに「教ナシ何だ、そんな面倒な事は聽かないでも宜い」といふやうにはぢき付けるのは、恰度器がひつくり返

つて居るのである、上から水をかけてもバツと飛んでしまつて、内へは少しも這入りはしない、それでは駄目だといふのである、それから「漏」といふのはもるといふ字でありますから、一旦入れたやうだけれども、茶碗に孔があいて居るか、罅があいて居つて、何時とはなしに漏つてしまふ、これは今日斯うして教の話を聴きにお出でになつて居る人の中にも、よほど注意せんと、一旦ちやんと入れた積りでも、何時となしに気が抜けて行くといふことがある、これは大いに警戒を要する所である、それから「汗」といふのはけがれであるから、その器に何か汚ない物がついて居れば、たとひそれが非常に結構な御馳走でも、ちよつと鼠の糞みたやうなものが一つ這入つて居つたならば、それが爲に折角の御馳走も駄目になつてしまふ、是は何を意味するかといふと、所謂誇法のけがれと申して、日蓮聖人はその點を殊にやかましく言うて居られるのであります。そのけがれの事は最も大事な問題として、誇法は一番恐ろしいものぢやといふことを、日蓮聖人は仰せられて居るのであります。それから「雜」といふのはこれ赤いろ／＼の物が混るので、水の中に油がまざるとか、或は砂がまざるとかいふことになれば、これを用ひることは出来ない。即ち雜炊法華といふのはそれである。

この四つの失を免れたものを「完器」といつて、完全な器といふのである、即ち正しい信仰といふのは、始終教を聞き、さうしてその聴いたものを忘れぬやうにし、又正しい意味を維持してけがれぬやうに、雜らぬやうに、純粹の信仰といふものを維持しなければならぬ、これを器について説明せられたので、秋元鈔といふ表題を考へれば、「あ、彼處には器の譬があるナ」といふ事があたさに響く譯である、それが爲にこれは有名な御書になつて居るのであります。

慈覺大師事

日住禪門御返事

上野殿御返事

妙心尼御前御返事

この中には孰れも別段抽出する所がありません。

妙一尼御前御返事

これは簡単な御文章でありますから、全文を御紹介したいと思ふ。

夫れ信心と申すは別にはこれなく候、妻の夫をおしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の子にはなれざるが如くに、法華經・釋迦・多寶・十方の諸佛・菩薩・諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候なり、しかのみ

ならず正直捨方便不受餘經一偈の經文を、女の鏡をすてざるが如く、男の刀をさすが如く、すこしもすつる心なく案じ給ふべく候、あなかしこあなかしこ。(繪圖遺文錄 一九四八)

これは讀んで字の如く、信心といふものは燃え立つあこがれの心、渴仰の心がなくてはいかぬ。精神のものであるから、恰も妻の夫をおしむが如く、夫が妻の爲には命をも捨てるが如く、親の子を思ひ、子の親を念ふが如く、この情熱がそこにあつて、さうして信仰といふものが成立つのである。信仰といふものは唯だ形式的ではならないものである、夫婦にしたところが唯だ形式的に、口で「お前は大切だ、俺はお前を思つて居る」と言つた所で、實際思つて居なければさつぱり駄目なものである。「夫は大切です」といふやうな事を、口でいくら朝から晩まで「夫は大切」と言つた所が、實際夫を大切にしなければ何にもならぬ、その通りに、宗教が餘り形式になつては駄目である、どうしても佛様を渴仰し、法華經の有難い意味を渴仰しなければならぬ。それには唯だ法華經を有難いと言つても駄目なので、幾分かその教の意味を心得なければ、渴仰の精神は起らぬと思ふ。昔はあれでも起つたかも知れん、お經の讀聲などで、美しい聲で讀んだら「あゝ有難い」と思つたかも知れんけれども、それは法華經に感心するのではなくて、坊さんの聲に感心するのだから、法華經の意味は判らないことになつてしまふ、法華經が有難いといふには、どうしても法華經の意味合ひを幾分でも會得して來なければならぬと思ふ、たとひ御遺文の中にさういふやうな意味があつたに似た所が、これは時代でありませう、唯だ有

難い／＼と言つたのは寧ろその一時で、お釋迦様の教はさういふものではない、又宗教の本質がさういふものではない、この文章に書かれて居る如く、妻が夫を思ふが如く、夫が妻を思ふが如く、生きたる互の情熱があつて、それが宗教の力になつて出て來るものでありませう。

モウ一つは、女が鏡を大切に、男が刀をさすことを忘れなかつたやうに、法華經には謗法の間違のないやうにしなければならぬ。昔の武士といふものは、何を忘れても刀だけは忘れはしない、一切の物を賣拂つてしまつても、刀だけは賣らなかつた、どんなに落魄しても自分の身を離さないものは、命とさうして刀であつた。それ程に日蓮主義者は謗法といふことを恐れて、正しい信仰をしなければならぬといふ事を書かれて居る、これは實にこの教訓の大事な所である。「正直に方便を捨て、餘經の一偈をも受けず」といふ經文を、女の鏡を捨てざるが如く、男の刀をさすが如くに、少しも捨つる心なくこの經文を守つて行けと言はれた。

どうぞ皆さんは、今日申上げた中にも多大の教訓が含まれて居ると思ひますが、益々日蓮聖人の御教を研究し、且つ唯今申すやうな情操が燃え立つて、朝起きてお勤行を一つしても、道行く場合にお題目を一べん唱へても「あゝ有難い」といふ精神の燃えるやうに、訓練をして行かなければいけません。餘り研究に沈れると燃えなくなる、そこが洵に情けない點である、非常に仲の好い夫婦であつても、毎日毎日亭主が何處へも行かぬで顔を見て居るといふことになると、「少しはあなた遊びに行つたらどうで

「す」といふやうになる、をかしげなものであります。そこでこの日蓮主義の話でも、始終聞いて居ると「ウン又あれか、又あれか」といふ事になる、これは實に人間の弱點だと思ひます。であるから同じ事を聴いても、又知つて居る事を聴いても、その感想を新しくして行つて、さうして燃ゆるが如き信念を喪はぬやうにといふ事を、自からの心得としてやつて行かなければならぬ。長く信心して居つて、信心に徹が生えて來るといふやうな事があつてはならぬ、どうぞ健全なる諸君の信仰を祈る次第であります。

智度の大道は、佛のみ従つて來たまふ。智度の大海は佛のみ窮盡したまふ。智度の相の義は、佛にのみ無礙なり。智度無等の佛に稽首したてまつる。
 有無の二見滅して餘すこと無く、諸法實相は佛の所説なり。常住不壞にして煩惱を淨む。佛の尊重したまふ所の法に稽首したてまつる。
 已に世間の諸の事業を捨てて、種種の功德の所住處となり。一切衆中最上と爲る。眞淨の大徳僧に稽首したてまつる。
 — 大智度論 —

開目鈔講話

(承前)

小林一郎

予事の由を推し計に、華嚴、觀經、大日經等をよみ修行する人をば、その經經の佛菩薩諸天等守護し給らん、疑あるべからず。但大日經、觀經等をよむ行者等、

法華經の行者に敵對をなさば、彼の行者をすてて法華經の行者を守護すべし。例せば孝子慈父の王敵となれば、父をすてて王に參る、孝の至也。佛法も又かくのごとし。法華經の諸佛・菩薩・十羅刹、日蓮を守護し給上、淨土宗の六方諸佛、二

十五菩薩、眞言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護し給べし。例せば七宗の守護神傳教大師をまほり給しがごとしとをもう。

これはなか／＼大へんな議論です。華嚴經を讀んで居るとか、大日經を讀んで居るとかいふ人も随分世の中に居る。それは無論華嚴經でも大日經でも隨分善い事が説いてあるから、さういふ經を信じて居れば、其の經に縁のある佛とか、菩薩とか、天上界の神々とかいふものは、其の經を信じて居る人を保

護するだらう、是は間違ない。併ながらさういふ經は、要するに法華經に依つて統一されるべきものなのだから、日蓮聖人が前にも言つたやうに「一切經讀まざるにしたがうべし」他の經に説いてあるやうな意味は法華經の中にみなこもつて居るのだから、法華經を信ずることが一切の經を信ずることになるのだ、斯ういふのです。いろ／＼な枝葉は幹に繋つて居るのですから、幹をシツカリ捉へれば、枝葉は自然にくつ附いて來ると同じやうに、法華經を信じると他の經を捨てるといふのではない、そこを間違へてはいけない、法華經の中に入つて居るといふのです。法華經には根本のことを言つて居るのだから、其の根本を所を捉へれば、他の枝葉の所は自然此の中に含まれて居るのだ、斯ういふ意味であります。そこで、法華經は他のお經より上だ、斯ういふ。是はいつかと言つたやうに「相待妙」で、他のものと較べて是が上だといふ見方、お經の内容と内容を

較べて見れば、法華經の方が深いから此の方が上だ、是が「相待妙」といふ見方です。それから今度は、法華經の中に説かれて居ることに他のものがみな含まれて居る、斯ういふ見方をするのが「絶對妙」といふので、此の二つの見方があるのです。此の「絶對妙」の方を忘れてしまふと、先刻から言ふやうに喧嘩腰になる、他のものと對ひ合つて「俺の方が一番上なんだ、他のものは追拂つてしまはう」といふ心持になる。併しよく考へて見ればさうではないので、みな法華經の中に含まれて居るものだから、喧嘩腰になる必要はチツともない、他のものは自ら入つて來る、さういふ廣い心持を持たなければいけない。法華經は木の幹のやうなもので、枝葉がみなくつ附いて來るわけです。そこで、他のものを相手にして喧嘩をするとか、争ふとかいふ譯はないのであります。それを「一切經讀まざるにしたがうべし」と日蓮上人が言つて居られますが、そこらによ

く考へて見ないといけないと思ひます。

いつか此處で話したと思ひますが、二三年前でした、私の知つて居る或る眞面目な良い學生で、時々斯ういふ會にもやつて來たり、私の家にもいろいろな話を聽きに來て居たのですが、或日それが、「大へん大事な問題があるのですが」と言つてやつて來た。どうしたのだと聽くと、自分は田舎に母親が居るが、其の母親が此の間、自分の事を一生懸命案じて、無事で居るやうにと言つて成田さんのお札を送つて呉れた、けれども法華經を信ずれば他のものは信じてはいけないといふことだから、私はお札をどうしようかと思ふのだが、どうも子供のことを本當に案じてお札を送つて呉れた母の心持を考へれば、之を破つてしまつたり、塵籠に抛り込むには忍びない、どうしたらいいでせう、小さい問題のやうだけれども、自分に取つては大事な問題です、斯う言つて相談に來た。私は、それは結構なことだ、母

親の愛情をそれまでに認めるといふのは結構なことだ、だから法華經の中にみな入つてしまふのだ、法華經のことが本當に解りさへすれば、成田の不動さんだつてみな入るのだから、決して成田さんのお札を捨てるにも及ばぬ、それでお母さんには、自分は法華經を信じて居る、法華經にはすべてのものが入つて居る、だから自分の心から法華經を信じて居れば成田さんも守ることになるのだから、お母さん安心してよろしい、こつちにみな入つて居るのだからと、そこをよく解るやうに言つてやつたらよからう、と言つて歸したのですが、さういふ風に考へれば自ら了解出來る筈です。

そこで、いろ／＼なお經を讀んで信心すれば、其のお經を守る神様が其の人を守るだらうけれども、どつちかといへば法華經が根本だから、若し他のお經を信じて居る人が法華經を信ずる人と敵になる時になれば、ほかの經を守る佛や神様も法華經を信ず

るものを守つて下さるだらうと自分は信じて居る、斯ういふのであります。是はそれだけの自信があつてよい譯です。別に觀音様に詣つて拜まないでも、法華經を本當に信じて居れば觀音様が自分の後について來て呉れるのだ。或は又、成田さんへ行つて不動様を拜まないでも、法華經を本當に信じて居れば不動様でも守つて下さるのだ、斯ういふやうに思ふといふのです。是が日蓮上人の信仰です。他の經を守る神でも、法華經に依つて他の經が意味を成すのだから、法華經を信ずるものを守るといふことにならう、斯う思ふのであります。

そこで議論がむづかしくなる。さう思ふのに、どうもどの神様を守らないで日蓮がひどい目に遭ふのはどういふ譯だらうか、斯ういふ議論になつて來る。どう考へたつて是が根本だから、法華經を信じて居れば有ゆる神様、有ゆる菩薩が守る筈ですが、日蓮をチツトも守らない、而もだん／＼ひどい目に遭ふ

のはどういふものだらう、斯ういふのです。さうする

ると、イヤ其のひどい目に遭ふことが即ち守つて居るのだ、ひどい目に遭ふから教が弘まるのだ。一應考へると、守るといふのだから自分が幸福になりさうであります。さうではない。大きな事を成し就けるには、有ゆる困難を冒し艱苦を忍ばなければ出來上がらないのでありますから、苦んで居るといふことに依つて教が弘まる、さうすると、苦んで居ることが守られて居ることです。是は有難いことです。本當に考へるとそこまで行くのです。ひどい目に遭ふのが自分が守られて居るのだ、斯う思へば、是は實に大きい心持になる。之に依つて自分が勵まされる。安樂でボンヤリして居たら、それはシツカリした信仰とは言へないだらう。そんなにひどい目に遭つてもそこで一生懸命にやるので自分の信仰が固まるのだ、ひどい目に遭はされて居るといふことが實は守られて居ることだ、斯ういふやうなことに

なる。

一寸つさらぬ話をするやうですが、芭蕉といふ俳人が常陸の鹿島に月見に招かれて行つた。八月の十五夜の晩です。ところがどうも月がよく見えな。雲が出て來て時々月が隠れる。時々雨さへバラ／＼と降つて來る。晴れて月が出たかと思ふとまた雲がかかる。そこで一行の人も残念がるし、又向ふで招んで呉れた人も、折角來て貰つたのに月が見えないで残念だと言つた。ところが芭蕉が其の時一句作りました。

雲折をり人を休むる月見かな

月を始終見て居てはくたびれてしまふ、時々雲が出て休めて呉れる、暫くして雲が散つて來ると、今まで見えなかつた月が大へん奇麗に見える、雲が出たり晴れたりするのでくたびれないで大へんいい、斯ういふ意味の句を作つて居るのですが、人物がよく現れて居る。成るほどさうで、折角月見に來たの

に雲が出てつさらぬと思ふより、時々雲が出て休めて呉れるので餘りくたびれないで夜通し月見が出來て有難いといふ、そこは見方です。だから妨げがあつたといふことに依つて自分が勵まされるとすれば、妨げがあつたといふことが有難い、斯ういふのです。

本當に眞面目に考へて見ますとさういふ風に考へられるのです。大概の人は辛抱する力がないものですから、少しばかりやつてうさく行かないと直ぐ參つてしまふものですが、そこをだん／＼推し進めて行くのであります。いろ／＼な經を讀む者が法華經の行者に敵對をするならば、其のいろ／＼の經を信ずる者を捨て、法華經を信ずる者を守るのが當然だ。例へば親孝行の子が、自分の親が王様の敵となつた時には、親には氣の毒のやうだが親を捨て、王様の方に行く、それが忠義であるのは勿論だし、本當の孝行だ。何故ならば親だつて王様の家來だから、

王様に敵對は出来ない、だから王様の方に行つて親を苦しめて、さうして親が不忠な事を爲さないやうにしてやるといふことが、それが本當に親を教ふ道である、だからそれが孝だ、斯う言つてある。是は日蓮上人の考の非常に徹底した所です。日本の國で若し自分の親が天子様に叛くことがあれば、それは親を敵にしても天子様のお味方をすべきである、それが親を教ふ途です。親に勝手な事をさせれば其の爲に罪を作るのだから、之を敵として罪を作らせないやうにするといふことが、それが本當の孝行である、斯ういふのであります。

一寸こゝで餘計なことを申しますが、日蓮宗の信者の人が餘り日蓮上人を偉くしようと思つて、時々歴史上の事を出鱈目を言ふ人があつて困る。平重盛が、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずと言つて歎いたが、この日蓮上人の言葉を知つて居たらあんなに困らなかつたらう、斯

ういふことをよく言ふ。それはいけないのです。是は源平盛衰記か平家物語を讀んで見れば判るのですが、重盛は、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、どうも困りましたなあと言つて居るが、實は天子様の方について居る。それには清盛もスツカリ弱つて、自分の息子が天子様の方について居るのですから、それで法皇を幽閉し奉ることはやめて平和に納まつたのです。ですから歴史上の事實を枉げてさういふ議論をするのはいけない。重盛といふ人はなか／＼シツカリして居た人で、芝居などで、重盛の進退谷まつたと言ふが、重盛の進退は谷まつて居ない、チャンと天子様の方にいて居るのです。さうして一族の者もみな重盛の方に加つたものですから、さすがの清盛もスツカリ弱つて、法皇を幽閉し奉らうと計畫したのをやめたのであります。本當にシツカリした人はそれでも孝の道はあるのです。重いと軽いとを見わけなければ

る。それだから法華經を信じて居る者を守らない筈はないのである。

ばいけない。だから法華經が一番勝れたものである以上は之を中心にして、他の輕いものは寧ろ捨て、もい／＼捨てるといふのは、まるで捨てるのではない、其の中に入つて居るのですから捨てることにはならない、そこらをよく考へて見ればいゝのであります。

それで佛法も亦其の通りである。法華經の諸佛・菩薩・十羅刹といふものが日蓮を守り給ふ上に、淨土宗の六方の諸佛とか、二十五の菩薩とか、或は眞言宗の方で言ふところの千二百の佛や菩薩、或は其ほかの七つの宗、是は奈良朝の末までに傳はつた六宗に眞言宗を入れて七つといふのです、つまり法華經以外の宗といふ意味に取ればいゝのです。さういふいろ／＼な宗を守つて居るところの菩薩とか善い神といふやうなものも、日蓮を守護し給ふべき筈である。例へば七宗の守護神が傳教大師を守つたといふことが叡山に傳へられて居るが、それと同じであ

日蓮案じて云、法華經の二處三會の座に在し、日月等の諸天は、法華經の行者出來せば、磁石の鐵を吸ふが如く、月の水に遷るが如く、須臾に來て行者に代り、佛前の御誓をはたさせ給べしとこそおぼへ候に、今まで日蓮を訪ひ給はぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか。されば重て經文を勤へて我身にあてて身の失をしるべし。

「二處三會」といふのはいつかも申しましたけれども、法華經は一番初め靈鷲山の平らな地面の上で説かれた、それから多寶如來の塔が平に懸つたもので

すから、お釋迦様は其の多寶如來の塔に入られた、そこで聽く者も亦佛の力に依つて一緒に空に昇つて教を伺つた、其處で一段の説法が終つて復たもとの場所を下りて來たので、「二處」といふのは空と地面の上、それから一番初めが地面で、次に復た地面に戻つたといふのですから「三會」です。空に昇るといふのはどういふことを意味するかといへば、それは絶対の眞實の理を知るといふことです。空は總てのものを蔽ふ。地面には高低があるが、空は高い山の上でも低い谷の上でも、奇麗な所でも穢い所でもみな蔽ふ。佛様の慈悲も其の通りであつて、善人は勿論、惡人をも救ひ、利巧な者も愚かな者もみな救つて下さる。だから佛の慈悲を知る爲に、みな空に於て教を説く。そんなことがあるものかと言ふ人もあります、やはり佛の教を信ずると空に昇つたやうな氣になる。人間を惡者だの、馬鹿だのと言つて隔てることはなくて、みな修行の仕方によつては佛

月の水に映る如くに、どんなむづかしい所でも忽ちに其處に來て、さうして其の法華經の行者に代つて、いろ／＼苦しい目に遭つたりして居るのを救つて呉れる筈である。諸天は佛様の前で立てた其の約束を果さなければならぬと思ふ。それなのに今日蓮が斯うやつてひどい目に遭つて居るのに、神様も佛様もチツとも助けに來て下さらないのは一體どういふ譯だらうか、斯ういふことを明にしなければならぬ。

何故こんなことを言ふかといふと、日蓮上人は無論判つて居るのですが、此の開目鈔を弟子に讀ませる爲に書いたものです。どうも法華經を信ずる者を守るといふのに、チツとも守らないではないか、自分の師匠の日蓮上人は佐渡に流されてしまつて生きて歸らぬのではないか、それでは法華經の本文も書にならぬ、斯うみな思つて居る。だから日蓮上人が佐渡に流されてから、一時鎌倉に於ける信者は非常

の境界に到達することも出来るものでありますから、さういふ心持になる。

明治天皇の御製に

ひさがたの空はへだてもなかりけり

つちなる國はさかひあれども

といふのがあります。是は土地の上の國はみな境界があるけれども、空は隔てない、どうかさういふ心持になりたいものだといふことをお詠みになつたものです。今の吾々は土の中に埋れて居るので、空の上の心持にはなりにくいのであります、だん／＼信仰を積んで行けばそこまでなれる譯です。

そこで日蓮がよく考へて見るのに、其の法華經の二處三會の座に在した天上界のものは、法華經の末の世に弘まることが助けようといふことを佛様の前で約束をして居るのだから、若し時期至つて法華經の行者が出るならば、磁石が鐵を吸ふ如くに、又

に滅つたのです、何故なら、あの時分には佐渡に流されて行つた人で歸つたといふ例は殆どなかつたのです。兎に角佐渡へ行けば佐渡で死んでしまふものだ、だから日蓮上人も佐渡で死ぬだらうと一般の人が思つて居た。そこで、自分達が幾ら信心したつて、師匠は佐渡へ行つて死んでしまつて再び會へないから馬鹿々々しい、中心がなくなつてしまふのだから、これは他の方に移つた方がよからうといふやうな淺薄な考の人が随分出來た。だから日蓮上人が佐渡に御流刑になつてから、信者が非常に減つて居るのであります。其の事は随分いろ／＼な御書の中に於て居ります。それでも四條金吾といふやうなシツカリした人が鎌倉に居りますが、其の人に日蓮上人が、一寸見ると日蓮は見捨てられて居るやうに見え、お前達もさう思ふであらうけれども、實はさうでない、此の苦しい中を越えて行つて法華經は本當に弘まるのだから、勇氣を失つてはいけない、此

のくらのことで信仰が動搖するやうではいけないといふことをズツと説かれてあります。だから開目鈔はいろ／＼に言つてある。本當の信仰に徹底するまで言つて居られますから、自分達の身に引較べて見ますと是は如何にもいい教訓であります。私共も何か一つでも善い事をしようと思つて居ても、邪魔が入ると出来ない。どうして邪魔が入るのだらうと思ふけれども、邪魔が入るのがいいのだといふ心持にはなか／＼容易になれぬ。さういふむづかしい所を通るので初めて善い事が出来る。だから自分達は神や佛に見捨てられて居るのではない、守られて居るから斯ういふ邪魔が入つて來るのだ、といふ心持を持たなければいけない。結局後になつて見ると、其の時に災難だつたことが幸福になつて居るかも知れないのです。

亞米利加の初代の大統領ワシントンは、あんな立派な人で、其の奥さんも立派な人であつたが、夫婦ふことになる。つまり人間の幸不幸といふことは、其の後に處する自分の態度次第で決まるのだから、是はいつも言ふことですが、それが善い事であつたか、悪いことであつたかといふことは只今では決まらぬ、其の後で自分がどういふ態度を執つたかといふことに依つて、不幸のやうに見えたことが幸福にもなれば、幸福のやうに見えたことが不幸にもなるのだから、此處を考へなければいけない。自分達は凡夫だから、誤解もあれば失敗もある、それを善い事にするのは自分の今後の努力に依るのでといふことを考へればいい譯です。さういふことを日蓮上人はいつでも教へられて居る。其の難かしいといふ事がいいのです。其の難かしいといふのを避けてはいけない、それでは大きな力にならぬではないかと

の間に子供がなくて、どうも子供が一人もないのは淋しいと始終歎いて居つた。ところが亞米利加の獨立戦争が起り、ワシントンが總大將となつて七年の間英吉利と戦争を續けて到頭勝ちました。さうして初代の大統領になり、大へんな希望でありましたから二期、即ち八年間大統領を勤めて、それから辭めて田舎に歸り百姓をして終つたのですが、其の大統領の任期が終つた時に、ワシントンが細君を顧みて、子供がないのが幸福だつたナ、あの戦の時に、若し子供があつたら、自分は凡夫だから子供の愛に惹かされて我軍の總大將に頼まれても斷つたかも知れない、又戦争最中にどうも子供のことを氣にして居て勇敢な働きは出来なかつたかも知れない、だから自分に子供が無いのは、亞米利加人全體を自分の子供と思つてシツカク働けといふ神様の思召だつたらう、人間より神様の智慧の方が大きいナ、子供のないのが幸福だつたナと、細君と話合つたといふ

いふことを言つて居られるのでありまして、其のくらの決心をしないとなか／＼難かしい所は通つて行けないであります。そこで、斯ういふ譯であるのだから、ヒョットしたら日蓮は法華經の行者ではないのだらう、法華經を世の中に弘める資格の無いものだらうといふ疑が起るのだけれども、それではいかぬから、經文をよく考へて、それで自分の身に引合せて、此の災難に遭ふといふことが果してどういふ意味を成すかといふことを、是から論じて行かうといふのであります。

疑云、當世の念佛宗禪宗等をば、何なる智眼をもつて法華經の敵人、一切衆生の惡知識とはしるべきや。答云、私の言を述べからず、經釋の明鏡を出して謗法の

醜面をうかべ、其失を見せしめん。生盲は力及ばず。

今度は一轉して、茲に疑問を出して申しますには、當世の念佛宗・禪宗等をば、如何なる智慧の眼を以て見たならば、それが法華經の敵であり、一切衆生を迷はす悪知識であると知るべきであるか。そこで答へて言ふに、それは自分一人で勝手なことを立て、はいけない。お經の中に根據があるのだから、其の經の中の言葉を鏡として、謗法の罪、即ち法華經の妨げをするもの、考の間違つて居ることを一つ擧げて見ようと思ふ。

此の事は前にも、斯ういふやうに法華經を弘めなければならぬといふことは二つの理由があると言つてある。一つは教其のもの、二は時なのです。教其のものが一番善い教でなければ永久の生命はない。法華經は釋迦様御自身が仰しやつたやうに、方便

ですから、日蓮上人は、教の上から言つて法華經が一番だし。時代から言つても法華經を弘める時代が來て居ると言ふのです。併ながら法華經を弘めるには、世の中が眞暗闇になつて居るのを明るくしようといふのだからなか／＼骨が折れる。それ故に其の骨の折れるといふことが空論だけでなく、眼の前に出て來れば必ず法華經の弘まる時が來る。妨げが來ないやうでは弘まらぬ。みな呑氣にして居たのでは妨げは來ない。妨げが來るのはみな必死になつて居るからで、之を突破して行けば弘まるだらう。だから妨げが來るといふことが法華經の弘まる因になる。是は始終言つて居る『本尊鈔』の中にも其の事が言つてあつて、始末の悪いのは「法華經ですか、結構です、勝手におやりなさい」と言つて向ふを向いて居る人で「法華經などは仕様がな」と言つて一生懸命邪魔するのは是は始末が悪い、それだけ眞面目なのだから、捉へてだん／＼話して行つて、解

を捨て、無上道を説くのであつて一番勝れた教であるから、之を信じなければいけないといふことが一つの理由。第二の理由は、どんな教でも時に遣はなければ弘まらぬ。藥をいつでも飲んだらいいといふ譯には行かない。風邪をひいたぐらゐの時に肺病の藥を飲んでも仕様がな。だから藥といふものは病氣に依つて飲み、教といふものは時代に應じて弘まるのだから、法華經のやうな徹底的な教を弘めなくても教へる時代には、寧ろ判り易い、他の教でやつて居てもいい。併しだん／＼世が末になつて來て人の心が險惡になり、普通の教では跳ね飛ばされてしまふやうな時になると、其の時は本當に法華經が弘まるのだから、教其のものの内容を知らせるといふことと、時代を見るときといふこと、此の兩方をやらなければいけない、斯ういふのでせう。そこで教は方便を捨てる教が一番いい、時は末法の世といつて、世の中がスツカリ混亂した時に弘めるといふの

れば附いて來る。向ふを向いて居る者は一番始末が悪い。だから妨げが來るといふことは、其の妨げを打破つて此の教を弘めるといふ證據だ、斯う説いて居るのです。だから何故いろ／＼な難儀な目に遣ふのが嬉しいかといへば、人情としては難に遣へば苦しいのだけれども、其の難に遣ふくらゐの所を通つて行かなければ眞實の教は弘まらぬ、だから難に遣ふことが結構なのです。是は自分で勝手に判斷したのでなく、法華經の『寶塔品』の中に繰返し／＼言つてあることなのであります。

是からあとズツと本文を讀んで行きますと、五つの事を日蓮上人は擧げて居られる。それは『寶塔品』の中に三つの事が書いてある。其の三つの事といふのは、法華經を末の世に弘めなければならぬといふこと、骨が折れるには非常に骨が折れるぞといふこと、骨が折れてもそれでも骨折つて居れば無駄にはならぬぞといふことであります。あとの二つは「提

婆品」に、法華經を信ずれば惡人でも佛に成れるといふこと、女といふものは罪が深いと言はれて居るが、女だつて法華經を信ずれば佛に成れるといふことがあります。之を五の勅宣と申しまして、佛様の仰しやつか五つの大事なことと言つて居ります。此處には先づ「寶塔品」の中にある三つの事を取出して説かれまして、骨が折れるといふことを覺悟しなければならぬと言はれるのであります。だからもう少し先に讀んで行くと、日蓮上人が弟子に對して、一番初めに前達法華經の信者になる時に骨が折れると言つたのではないか、それを忘れて、今日蓮が遠流にされたからといつて憐てるやうなことは仕様がな、一番初めに法華經を信じたいと言つて来た時に、骨が折れるぞといふ目に遭ふぞといふことを言つてある、今頃になつて驚くべきではない、といふことを言つて居られます。之を言はれると言も無い。一體教を弘める人の態度は是でなければならぬ。

る 心得作法を教へらるゝ方であり
上行菩薩たる日蓮聖人が これに當られるのである。
次に
一證 とは この戒の授受を證明せらるゝ方であつて 廣く十方分身の諸佛が これに當られるのであり 更に
一件 とは 受戒者と共に 戒を受くる 同伴衆を指し
文殊 普賢等の 諸菩薩以下が 即ち これに當るのである。而て
戒とは 元來 止惡作善の二面を有し、
法華本門の戒は
止惡に於ては 謗法禁斷 を最要とし
作善に於ては 受持信行 を根本とするのである。かくて
授戒といひ 受持といひ 自誓受戒といふは、
必ず
戒師久遠實成の 大恩教主釋迦牟尼如來より 功德具足の 聲色の妙法を授與せられることであつて、この
功德にして
我等受戒者 即ち 法華經の行者は この
戒師たる本佛釋尊に對し奉り 今身より佛身に至るまで能く
持ち奉る南無妙法蓮華經 と自誓するを以て 最要の作法義
門となすのである。

ればならぬ。併し是では 商賣繁昌しませんから、大抵は「まあ宜しうございます、ナーニ骨は折れはしません……」と言つて居る。日蓮上人はさうではない。一番初めに、法華經を信ずるのはいいが骨が折れるぞ、シツカリやらなければ駄目だぞと言ひ渡してある。そこで、前に言ひ渡してあるのに此の頃になつて驚くといふのはどういふ譯だといふ議論が出て來るのであります。教を弘めるのに商賣式から言へば、初めからこんな難かしいぞと言つては大抵の人は寄りつかない、それでも集つて來る人が眞實の人である。だから初めといふものは容易くやるべきものではない、力を入れて、難かしい事を覺悟してやるのでなければ本當のことは出來るものではない。此の事が「寶塔品」の本文に依つてだんく論ぜられて居る譯です。それは此の次に申上げることに致します。

こゝに於て 始めて いはゆる妙法の當體蓮華たる 我等の身心が たゞに理としてのみではなく 實際に 本佛の 大功德を受得し 煥發するに至るのである。
こゝに於て
曼陀羅は 授戒作法の本尊として 三師一證二件の儀相をも 儼然として圓具してゐるのであつて、而て この授戒法に於て 戒體が妙法なるがゆゑに 中央に大書してあるのである。しかしながら その
聲字の内容は 戒師釋尊の 意輪感應より發する 因行の 萬善、果上の 萬徳なる 功德具足の 救済力であり その
授與者も 戒師釋尊であり
我等行者の 誓約の對境も 戒師釋尊である。
始中終を一貫して 戒師釋尊が 授戒法の中心である。
この 本師本佛釋尊の三輪の妙用に依つて 我等も亦 實に成佛得道し 同じく
本佛釋尊の 究竟の證得 究竟の應用を 成辨せんが爲に
その救済得道の方法として 本佛より我等に 功德を授受すべく その生佛感應の接觸點として 妙法があるのである。故に
曼陀羅に於て 妙法の題目が 中央に大書せられてゐる所以は、
一 曼陀羅成立の 根本原理たる 本佛三輪の妙化を 結晶

して、
 二 衆生修行の方法たる 修道より得道への救済力を 顯示せんが爲であり、而て こゝに
 本尊の意義の 不二而二の二面たる
 三 授戒作法における 戒體として 廣く本門の三師一證一件を整備し、この整備せる授戒形式の中に 更に
 四 本門の三寶が 具足して 光顯せられてゐるのである。而て
 授戒法における 三師一證一件の中に於ても この三寶を中心として 本尊を見るべきであつて
 歸依三寶は 始中終を一貫せる 佛教の大綱であり 一貫の原則であるのであるが、今こゝに
 法華經本門壽量品の 最深秘處より 發現し成立したる 本尊曼陀羅に於て その唯一絶對的三寶を 光顯したのである。故に
 (2) 日蓮教學における 信仰の對象たる 曼陀羅は、廣くは授戒法における 三師一證一件を整備したる 十界勸請の儀相であるが、その中心は
 三寶具足の本尊であるのであつて、しかも決して 三寶中の一寶にのみ局せるものではない。たゞに一寶に局するものではないのみならず
 本佛應現の妙用より發して 或説或示 己他身事 いはゆる

る 六或示現と稱する 統一神教の規模に於て 成立してゐるものであるが故に
 三寶具足調和の上に 佛法流布の あらゆる國土における 護法護國の諸天善神をも 包容せる本尊である、即ち これを
 三寶調和 諸天來攝の本尊 と稱するのである。ゆゑに 日蓮聖人の撰せられたる 撰法華經 いはゆる 祈禱經の勸請文には
 開述顯本法華經中常住の三寶 護法列位の諸天善神 と示されてゐるのである。而てこの
 護法護國の諸天善神をも 包容して その外護を明かにせられたることは たゞに
 三寶式の本尊としてのみならず 實に 戒壇式の本尊としても 深い意味があることを知らねばならぬ。即ちこの 護法護國の善神の中に於ても 特に
 我大日本帝國の國祖神明たる 天照大神 八幡大菩薩を 三寶諸天具足の本尊に また 戒壇式の本尊に 勸請せられたる處に 深遠なる意味が存するのである。
 (3) 元來 戒壇とは 受戒の壇場 といふことであつて、修行 即ち 修因に約する語であるが、これを果徳について言へば本佛實在の淨土を意味するものであり、この修因と果徳と 生佛道交する處に 戒壇の意義を成就するのである。

日蓮聖人の顯されたる 本尊曼陀羅の意義 (四)

佛子 河 合 陟 明

三十二 本尊曼陀羅における戒壇の意義 授戒法における三師一證一件の本尊 三寶調和・諸天來需の本尊 理壇と事壇 三秘圓融具足の本尊 事壇の意義 歴史の淨土の建設 統一神教の大理想 信仰と忠義との根本的一致
 統治經綸道と大覺成佛道との接通統一 本尊と國神の妙義 四海歸妙・神人同歸の戒壇 輪王統治の將來的光明
 歴史の先蹤 日蓮聖人の苦衷 護國の柱 門下幾多の法將の殉教的愛護 我等法孫の使命

三十二 前節に於て
 本尊曼陀羅の 結論的體系として
 古來 佛教修道の 二大系統たる
 信法 二行の 發揮と 統一を論じ まづ
 (一) 信行系の本尊たる 三寶に就て
 (1) 佛陀の信仰に約して 本門の佛寶たる 本佛釋尊を光顯し、こゝに 兼ねて 本門の僧寶たる 上行日蓮を發揚し、次いで
 (2) 教法の信仰に約して 本門の法寶たる 本法 法華經を光顯し、更に
 (3) 總持の信仰に約して 法寶の要法たる 本門の題目を光顯し、進んで
 (二) 法行系の本尊として
 (4) 觀念の攝得に約して 法寶所詮の極理たる 事の一念三千の 觀智の功徳を 信行の本尊たる 曼陀羅に攝盡し、以て 信法二行統一の妙旨を明し、

かくて 日蓮教學は 佛教最高の 統一的本尊と信行たる

人格崇拜 經典崇拜 神咒崇拜 眞理崇拜を 光顯して、小權普迹 乃至 諸他一切の 不完全なる 三寶 及び 知識の信仰を 否認することを示し、最後に

(5) これら 信法二行統一的信仰の 完全説として 本佛三輪の妙化に約する本尊 を論じて、こゝに 三寶式の統一的光顯と

知識信仰の完全なる獲得と 授戒法の整備的發揮

との 三面綜合せらるゝ所以を 提唱したのである。今は この中に於て 特に 最後の

授戒法の整備せる發揮 に就て その要綱を示さねばならぬ。

(1) 由來 本尊曼陀羅の 説明に就ては、上よりしては 本佛三輪の妙化より起つて、

下よりしては 我等衆生の信行を以て これに接觸し、こゝに 三塵立行 三業相應の 妙旨を成するのである。而てこの 信行的接觸の形式として 三寶が成立し、その

三寶信仰の具體的歸結として 授戒作法があるのである。従つて 日蓮聖人の示されたる 信仰の對象としての 本尊 曼陀羅についても

三寶光顯 即ち 三寶式と

授戒作法 即ち 戒壇式との 二面よりして 説明せなければならぬのである。而て今明かにせんとするところの授戒作法についても、小權普迹等の 諸經 諸宗に亘つて その形式 及び 内容は 種々に異なるのであるが、前述せる如く、法華經本門に於ては それらの一切を否定して

佛教における 唯一最高の授戒法を 示されたのであるから、今は直ちに この本門に顯されたる 戒壇式の本尊を 論明すべきである。

授戒作法の本尊とは 即ち 三師一證一件を 具足して 自誓受戒することをいふのである。而て

この中に 三寶は 含まれてゐるのである。三師とは 一に 和上(和尚)といひ 即ち 授戒師にして 受戒者に 戒を授けらるゝ中心人格であり 而て

久遠實成の本佛釋尊を 授戒師と仰ぎ奉ることは もとより 明かなるところである。

二に 阿闍梨といひ 又は 會行事ともいつて、受戒者を 輔佐し 披露せらるゝ方であり、

多寶如來が この阿闍梨に當られるのである。三に 教授といひ 即ち 受戒者に あらかじめ 戒を受く

理想に對して、 人道の立場に於て 直ちに佛道と接觸し 如來の境界における 大平和の理想を 人間の果報相應に 譬喩せしむる 一種の淨土、即ち 常住なる佛界の眞淨土に對する 影現の淨土、絶對的な佛界の理想に對して 人間界における その理想の縮寫、人間の佛陀的理想 法界的理想に對して 人間の人間の理想 歴史的理想、換言すれば、

人類の文化と道義の上における 一種 理想界 いはゆる歴史の淨土なるものを この地上に建設することを以て 人類生活の一個の目的とせなければならぬ。

我が國祖 天照大神の 天壤無窮の神勅 を始め奉り 神武天皇の大詔たる 天業恢弘 八紘一宇の大理想 乃至 今上 昭和の御宇における その實際の大發展たる 皇道宣布の聖戰 極東アジアの一角より發する 輪王統治 四海

一家の 經綸的曙光……

これ實に 人類歴史の世界における 大理想界建設への 莊嚴なる豫言であり 實踐であり、時の次元を超越して 現在が直ちに 久遠の太古に接觸する 天の滄海を以てして、まづアジア大陸に 修理固成の大業を成せんとするものであり、神武肇國 美々津の御船出の 再臨であるのである。

かくの如き 人類世界の 統治經綸道における 絶對權威たる

神國大日本は、その道義的實力に配するに 文化の最高理想として 進んでは 人道より佛道の絶對界へ 大向上發展せしむるものとして

人類古今一貫の 最終目的たる 宗教的絶對道そのものと 究竟根本の 融合統一を成し遂げねばならぬ。けだし 全人類が 靈肉兩面の 眞正の福祉を 共に實現して いはゆる 一乘の大徳教を形成し かくて

現世の絶對權と 靈界の至上權との 根本的統一を齎すは 實に 人類衷心の希望であり 然り即ち 人類最大の福音であるからである。

(6) 日蓮聖人が 開目抄に於て 宇宙の大より論じ來りて 眞理の極致を 完全の大人格に體現したる 絶對界の本佛釋尊を光顯し、その全法界における 無始以來 主師親 三徳の 大恩教主 大慈悲教主たることを宣揚して、

佛教内部における 諸佛諸神格はもとより、人類思想の産出したる あらゆる宗教信仰 對象を 悉く

この一大根本靈格に 包容攝盡し 還元歸本し、以て 本佛の絶對的應現を論ずる 汎神・一神 融合の 本迹觀を 大成し、こゝに 具體的 積極的 成立宗教として 人文 史上 千古未發の大教義たる

統一神教を構成し、この大理想より 翻つて 我が皇室の祖神をも この絶對本佛の應現たることを 唱道

ある。

し、以て

宇宙的絕對の 宗教的本佛と

國家的絕對の 國祖の神明とは 實に 同根一體なることを 教へ

宗教の根本教義と 國體の淵源とを 融合開顯し、以て 偉大なる宗教本尊の信仰の中に 國家觀念を包容同化し、 しかも 人類平等の 慈悲博愛の理想に 立ちつゝ、因縁 の親疎 仁義の調節 特に

我が國體の 萬邦無比なる 尊嚴卓越と

佛教の魂魄 大統一的教義たる 法華經との

微妙不可思議なる 先天の約束 本質的 また 歴史的 冥

契照應に感激しては

『兩眼瀧の如く 一身悦びを遍くす』と熱涙を流し

『日蓮は 一閻浮提第一の 法華經の行者なり』との 大目

覺に立ちつゝ、その誓願を表白するに當つては

『大願を立てん 我れ日本の柱とならん 我れ日本の眼目と

ならん 我れ日本の大船とならん 等と誓ひし願 破るべ

からず』と唱へて

一天四海皆歸妙法の中心を 我が國體に取り、以て

立正安國 法國冥合なる 卓犖不拔の 國民的大信念を 確

立せられたることは

今尙ほ 昭々として 皇國の現代 及び 將來を 照し居る

る。而てこの

戒壇なるものには 理壇 事壇の 二種があるのであつて

理壇とは 精神的意味に於て 吾人の信仰の當處が 即ち直

ちに戒壇となるのである。ゆゑに

神力品 等にはゆる

所在の國土に 若しは受持・讀誦・解説・書寫して如説修行す

ること有らんに 若しは經卷所住の處にても 若しは園の

中に於ても 若しは林の中に於ても 若しは樹の下に於て

も 若しは僧坊に於ても 若しは白衣の舎にても 若しは

殿堂に在りても 若しは山谷曠野にても……………

當に知るべし 是の處は 即ち是れ 道場なり

佛子 此の地に住すれば 則ち是れ 佛は受用したまふ 常

に其の中に在しまして 經行し 若しは坐臥したまはん

と示教せられぬ如く 我等が一念の信仰を喚起する處は

直ちに本佛が感應したまふ處 否 したまうた處

即是道場なり 即戒壇場なり といふことができるのであ

る。即ち 正報の此身は 本佛感應の當體蓮華を成じ、依

報に於てもまた 本佛常住の淨土の種因を成ずる。而て

我等の一個人に約しての 戒壇の意味は かくの如きもので

あるから、吾人信仰の生ける對象たる

實在の本尊は いかなる時 いかなる處にも 隨處に 感

應 應現せらるゝのであつて、何等の形式を要せずとも

ところの 光輝ある大主張たるのみならず 抑も 哲學と信仰 國家と宗教なる 古往今來 人類頭上の 懸案たるところのもの に對する 千古の鐵案といふべき である。

こゝに於てか

佛祖に對する信仰の大節 時に發しては 死身弘法の壯烈事

と現るゝ 殉教の道念と

君國に對する勤皇の忠誠 即ち一身を捧げて 天壤無窮の皇

運を扶翼する 大和魂との

この二種の 最も光輝ある 人間の熱誠が、内 吾人の觀念

に於ても 外 その行爲活動に於ても 根柢的一致を見る

に至り

法に竭すも 國に竭すも 共に 菩提を成就する所以の道と

なるのである。

こゝに於てか この二者の融合は 國家のためにも 人類の

ためにも 至大至重の 根本問題たるものが 知らるゝの

である。

⑦ かの いはゆる佛教諸宗が、哲學的には 未だ 十全な

眞實在を 論證する能はず、宗教的には 多佛敬漫 或

は 一佛孤立 或は 無神的汎神 の失に墮して 信仰の

極處に達せず

はたまた キリスト教は 唯一神の思想に發居して その偏

我等は この實在の本尊を勸誦し この實在の本尊に自誓

受戒すれば足るのであり、この意味に於ては

この實在の本尊を中心として その三輪の妙用 十界の 應

現を 寫象したる 圖顯的形式としての

曼陀羅をも超越するのであり、即ち

紙墨に表現したる 曼陀羅や 彫像 等は

眞實在たる 生ける人格の本尊なる いはゆる 靈山淨土の

生身・本佛釋尊と その救済活動を、寫象したるに他なら

ないのであるから、かゝる感覺的表象としての曼陀羅は

一定の儀禮的形式に於て 禮拜の對象となるものであり、そ

の眞意義は もとより 言ふまでもなく、この寫象を通じ

て 生ける實在の本尊たる本佛に直接するものであること

を 忘れてはならぬ。否むしろ かゝる心靈界における

理壇としての戒壇を考へるときには、屢々 前述せるが如く

に

曼陀羅とは 本佛の大覺に照さるゝ 宇宙の實相を表すも

の といふべきである、換言すれば

信仰の眼映する法界の實相 即ち是れ 曼陀羅なのである。

尅實して論ずれば

法界即曼陀羅 といふことができるのである。而て

④ 本佛を中心とする 三寶具足の本尊と、その救済の具體

的力用 即ち 方法たる 法實として、且つまた同時に

これに相應する 我等の信仰の最善形式としての この法實たる題目の信仰との、いはゆる 本尊と信仰と 宗教的客體と主體と 本果本因 兩者の 感應合一する處 むしろ 感應合一する相が 即ち 戒壇そのものとなるのである、しかも かゝる本佛と我等との感應道交する當處に 我等は直ちに 曼陀羅の大莊嚴界中に 入り了つて住するものとなるのであるから、かくて

一個の大曼陀羅なるものは、それ自ら 『本尊』であることはいふまでもなく、更にその中に『題目』を含み、またこの曼陀羅の全體が 生佛感應 主客合一の道場としてしかも 三師一證一伴を具足したる 輪圓具足の『戒壇』として 成立するに至るのである。

換言すれば
日蓮聖人立宗の根本義 (佛教唯一の宗 佛教の絕對的統一宗 佛教宗)たる
三大秘法は 一個の 大本尊曼陀羅中に 悉皆 具足統一せられてゐるのであつて、この三大秘法の周備せる説明に對すれば、これ以上重きものは 一も之有らざるのである。日蓮教學 否 佛教一切の 教義 及び 信仰は 悉くこの本門の本尊より發源し、また 本尊に統歸するのであつて、これを光顯する處に 大曼陀羅の妙相 眞實義が成立つた

みとめず、

もとり理壇の本質たる 個人的信仰の眞實義 即ち 我等の成道開覺の大理想は 法界絕對の事實であつて 天 地宇宙間 何物よりも 大なる 然り 法界そのものよりも大なるものであることは いふまでもないが、かゝる一個人格即法界大の成佛なる 個人信仰の永遠絕對性 に對して、更に同時に 世界的なる

人類將來の大理想として 地上歴史の淨土を建設すべく、その菩薩的先覺國家 人類統治の中心國家 王佛冥合の佛道國家 然り
その本質的感應に於て その歴史的傳來に於て その將來的建設に於て

法 國 無盡の因縁を 互具し 包藏し 發動する 本佛感應の聖國として
宇内の最勝靈國たる 我國が、たゞに過去に於て 法界の本 法たる 本佛の妙法が傳來し 闍浮第一の本尊が この國土に顯發せられたるのみならず、更に
將來の事實として この無上最勝の靈國が 無上最勝の本尊を奉安し、

佛祖照臨のもと 勅命を畏んで 國立戒壇を建立するに至るべきを確信し、安詳として 遺教を法孫に托し 萬世 賢 皇家主の御代を囑望せられたのである。

である。

而て 以上に於ては 戒壇の意味に 理壇と事壇との 存することを陳べ、まづ理壇を論じて 以て 三秘統一としての 本尊曼陀羅の意義を 説明したのであるが、更に 事壇なるものも 亦この曼陀羅中に 圓融統一せられてゐるのである。而てこゝに

大曼陀羅中における 我が國神勸請の事實が 極めて重大なる意義を 發現し來たるのである。

(5) 抑も 個人信仰の理壇に於ては 依正二報ともに 超感覺の世界 靈性の世界に於て 佛界の種因を成するのであり、むしろ 一人格の理壇としては 信仰の當體即己心の淨土 我身即本佛常住の心靈的殿堂 觀心本尊の深秘の神殿 となるのであつて 正報そのまゝ依報 といふべきであり、

この佛界依正の種因たる 因行の發展するところ 臨終を期しての 靈山往詣 成道大覺に於ての 寂光受用を 佛教信仰の最後の目的とするのであり、こゝに於ては もはや 人道を超越したる 佛果菩提の絕對的境界であるのであるが、

かくの如き 我等の 未來不滅の永遠生命の 無限なる向上發展による 佛道の絕對的成就 即ち 成佛といふ 最終

しかも かくの如き『事壇』かくの如き 國立戒壇の大理想

は、日本一國 一君萬臣の奉戴すべき處なるは いふまでもなく、更に一闍浮提 即ち全世界萬國の 共に同じく奉戴すべき處であるのであり、更に之に加ふるに 梵天 帝釋 等も 來下して 奉戴莊嚴すべき いはゆる 神人同歸の聖壇であるのである。無限の靈光 無限の御稜威を あまねく六合に光被する 大戒壇であるのである。

如來無限の神力によつて 唯一乘法 無二亦無三 唯此一事實 餘二則非眞 十方世界 通一佛土なる 法界の妙相を 地上人界に影現したる 人類最高の 理想的世界の建設であるのである。

これ實に 日蓮大士が 立正安國論 開目抄 本尊抄 撰時抄 三大秘法抄 等に於て 本化久遠の大知見力を以て 遠く人類將來の大豫言を 斷定せられたる所であるのである。

かくの如き 全世界同歸 神人同歸の 本門の本尊奉安の大戒壇が 必ずや 地上に建設せらるべき 其の最勝靈國の祖神として 人類統治の中心として 戒壇建立の中柱として 本佛應現の神明として こゝに

天照大神 八幡大菩薩を 本尊曼陀羅の中に 勸請せられたのである。これ 戒壇建立の原理相であり 將來相であり 又即ち 如實相である。而て その如實なる實現の曉

こそ

天業經綸 八柱一字の 皇國の大理想が
立正安國 四海歸妙なる 佛教的大理想と

先天的約束に由來する 根本的融合統一を 成し遂ぐるの壯
嚴なる黎明であり、更に大いに進んで 全世界同歸 人文
道義の統一たる宇内の光華 いはゆる 一天四海皆歸妙法
の成就の時至つては これぞ實に

本佛照蓋のもと 本佛感應の靈力を體現したまへる
我が萬世一系の天皇が あまねく全人類の上に 轉輪聖王
四海統治の御稜威を 光被したまふ時であるのである。
かくして

理壇は 一人格の信仰について 直ちに その法界的絕對性
を顯し

事壇は かゝる個々人格の信仰を 更に一層 現實的に具體
化し 積極化すべく 國家的正義の團結の下に統一し、む
しろ 正法と國家との統一せる實力を以て、内は 各人格
を 正義の信仰に導き、この國力を以て 正法を護持し宜
揚して、以て 外 世界各國全人類をして 同じくまた
この 無上の正法に歸入せしめむとするものであり、かく
て

内外共に 國力を以て 正法を流通し、據つて以て
四海一家 神人同歸して

法界の本尊たる本佛の尊嚴を光顯する大理想を 唱道せられ
たるものである。

(10) かくの如き 前人未踏の大誓願と 精神界無比の尊皇愛
國の大精神とを以て 皇國に顯發せられたる 國聖日蓮
の本尊曼陀羅!

これ速くは 佛祖出現の日に於て 親しく 見佛聞法の勝緣
に浴せし 友稱王 勝鬘夫人の 舍衛國におけるが如く、
また降つては 阿育王 迦膩色迦王の 盛時におけるが如
く、また更に 天台智者大師の 陳隋二代の國師として臨
まれたる如く、更に實に 皇朝に於ても

推古の御宇 聖德攝政の御時 或は 聖武の御代 南都の東
大寺 諸國の國分寺 等におけるが如く 殊に著しきは
桓武天皇の國師として 傳教大師が 一乘四頓の戒壇を 天
子勅命の道場として 皇城鎮護の地 比叡の靈峰に建立
し 日本一國をして 悉く 大乘法華經の菩薩となさむ

眞の國寶となさむと 誓願せられたるが如く、
歴史を案すれば 三國二千年に亘つて その先蹤芳躰は渺か
らぬのであるが、しかも これら英哲群賢の後にいで、
如來付囑の催すところ 時機因縁の熟するところ 教法流布
の序あるところ 國體靈力の發現するところ
法についても 國についても 確かに 光前照後の 眞實
義 絕對義を 煥發し 光宣し 開顯 唱道して

見獨斷を脱せず、特に 我が國體と融せず 祖神を否定す
二者何れも 睿智と信仰 信仰と忠誠との 根本的一致を見
るに於て 缺くるところあり

即ち これらの諸宗派は、宗教と 國祖の神明を 調節せ
んとして しかも その神聖を汚すもの多く
況んや これを 自家信仰の中に 調節し得ずして 却つ
て これを嫌忌するものあるが如き

又更に 儒者の一派における 淺薄なる 無神論的 宗教不
知の思想の如き 色盲者流の如き

否々 又實に いはゆる 神道者流と雖も 我が祖神を以
て 直ちに 宗教の絕對位 即ち 宇宙の神 と解するの
誤謬に墮して 護國の神たるの 位置を動かし、却つて
宗教の自由競争の渦中に投じて その神聖尊嚴を 禍ひせ
んとするが如き

又々況んや 唯物論者 無神論者の 憚むべき盲目者輩 聾
駘者流のもの如き
何れも 或は 正系を失し 或は 眞實在を明知せずして
摸索彷徨するもの 比々として皆然る中に 獨り

我が日蓮大聖人は
國體の祖神を以て 護國の神明としての 正位を動かさずし
て しかも偉大なる 宗教本尊の中に調節し、且つ云く
「念佛の行者は 彌陀三尊よりの外は 上に擧ぐる所の諸佛

菩薩 諸天善神をば 禮するをば 禮拜雜行と名づけ 又
之を禁す。

然るに 日本國は神國として 伊弉諾 伊弉册の尊 此の國
を作り 天照大神 垂迹おはしまして 御裳濯河の流れ久
ふして 今に絶えず。

豈 此の國に生を受けて 此の邪義を用ゆべふや』
論じ來つて こゝに至らば、大聖人は 宗教信仰の内に 護
國の神明を 尊敬せざる者を 邪義なりと論斷し、
みづから 敬神の本義 尊皇の大義を 發揮せらるゝこと、
實に 明瞭赫灼 錯々の響を發するあり

あゝ苟くも 天下の師表に立たんとする 志士仁人 紳等が
眞に謙虛なる 求道の一念を以て 靜かに 日蓮聖人の教
學を學ばゞ けだし實に 思ひ半ばに過ぐるもの なきを
得ないであらう。

(8) 日蓮聖人は 我が國體の 萬邦無比なるを 敬讚するは
勿論、先人未發の意義に於て 我國の天職を自覺せられ、
特に

大聖釋尊が 理想的文明を建設するに當り 佛教の一面の大
目的として 終生一貫の主張たりし
轉輪聖王の 靈力と天職を 我が皇室に確認し
かゝる 無限の御稜威と 絶大の徳風を 發揮したまふ 輪

王の皇室を奉ずる我國は

世界人類の精神界に 不滅の光明を與ふるところの 眞の道
を 興立し擁護する 聖國なりと せられてゐる。

聖人は 一面より見れば
世界最大の眞道たる 絶対無上の 妙法蓮華經を以て 我が
國家に捧げられたる 大忠無二の先覺者たると同時に、他
面より見れば

我が無上莊嚴なる 皇國をして 眞道を敬重せしむる 純潔
無比の聖者であり

皇道より見れば 萬代の國土にして 天祖神明の護國使たり
佛道より見れば 千古の法將にして 本佛感應の如來使たり
天壤無窮の神勅と

本佛當任の教詔と
兩々 遵奉し 發揚して

人類文明の王者たる 佛教の大理想と
人類道義の中心勢力たる 神國大日本の國體とを
深遠なる教理の根柢に 統一し、かくて 佛教 即ち

法界の本尊たる 絶対本佛と
國家の絶対たる 神明皇室とは

共にこれ 人生における 極威恩徳の 二大源泉にして
しかも その靈徳根元を 一にし
統治經綸道と 大覺成佛道と 眞俗二諦 世出二門 即ち

文明道義の統一的实力と 宗教救済の絶対的大道と、

兩々相攝し 互に協力して 人類の慶澤を將來すべく、而て
我國が 肇國宏遠の大理想たる 積慶 重輝 養正 八紘一
宇の 世界的大使命を 實現するに當り

國祖の神明は 常に絶大の靈威を發現し いはゆる天佑神助
のもと いかなる妨害をも排除して この人類正義の大理
想を 遂行せしめたまふ のみならず 更に

本佛は 宇宙絶対の救済者として 一切の靈徳の 無上淵源
なる 法界の本尊として 常にこの 天業經綸の完遂に
不斷の感應を垂れたまふを確信し、

進んで 全人類 乃至 法界一切の衆生をして 人道より佛
道に向上せしめ

最後絶対の靈格を顯現して 永遠不滅の實在に登らしめんと
大慈の念願やむことなき 本佛の優存を唱道し光顯し この
本佛の念願救済に相ひ應じて みづから學生の心血を注い
で この大實在を理證しまた實證するのみならず 更に

一切人類をして 又その 久遠の心眼を開かしめんが爲に
身命を捧げて 忍難弘通 活動奮闘せられたのである。
(9) かくの如き 千古未曾有 萬古不磨の 知見と慈悲とを
蘊在する

王佛冥合の大誓願を以て 國浮統一の大本尊を 皇國大日本
に光顯せられたる 日蓮聖人は、單に 戒壇を 理壇にの

佛祖 先賢 及び 聖人みづからの豫言が 眞に 世界史の
舞臺に於て 世界史的事實として 是か非か まさしく的
中實現したりし 『誘法の國家』と 元寇の國難』 朝野
を震撼せしめ 文武色を失はしめし その祖國國難の千古
の非常時に於て

凛然として
小蒙古人 大日本國に來たる と叱咤し
我れ日本の柱とならむ 我れ日本の眼目とならむ 我れ日本
の大船とならむ 等と誓ひし願 破るべからず!

と 護國の至誠 天地に震ひたる 日蓮大聖人!
この! 讀者よ知れ 我が日蓮大聖人が 護國殉教の血涙を
以て 末代にとゞめ置かれたる

大本尊曼陀羅を、然り而て 兩來法統七百年 門下幾多の
我が殉教護國の法將が血を以て護り來りし この大本尊曼
陀羅を、嗚! 何人か 一指をも觸れ得るであらうぞ。而
て又 この

大本尊奉安の戒壇國家として 人類に君臨さるべき 我が皇
國の祖神は、この佛教の本尊たる曼陀羅が 世界いかなる
國に於て奉安せらるゝとも 而て世界の將來に於て 必ず
や奉安せらるゝのであるが、いかなる時いかなる國に於て
奉戴せらるゝとも、我が皇國祖神の勳語は 斷じて一毫も
取捨變改を加へらるべきものに非ず! 誰か 本尊と皇國

法 國 二面の 腐敗と亂脈を 徹底革新すべく 敢然身命
を賭して、王佛一貫の 大義名分を明徹し 亂臣賊子をし
てその心膽を寒からしめたる 撥亂反正の巨人 護國の柱
石 日蓮聖人

然り而も 時運非か 因縁是か 佛祖聖經の明文 如來金口
の豫言 法 國 亂麻の相狀を 夙に識せられたる佛祖の
豫言、また その後に出で來りし 佛法流通の諸教傑が
三國二千年に亘つて 識せられたりし 先覺豫言、否々實
に 日蓮聖人その人が 天下何人も夢想だにせざりし時に
當つて 夙に 祖國の國難を豫言し 立正安國の大義を唱
道したりし その豫言の的中 憂國の至誠 護法の苦衷

との大因縁を無みするものぞ！
論じて此に至らば

皇國の現代及び 悠久の將來 國家文教の府にある者 否
朝野文武卓識の士 否々 實に 我が宗門 護法の佛子
道念の人 安國の志士

轉等 轉等が大使命を自覺して奮起せよ！

大衆人が魂喚發つて萬世にとゞめられたる

大木尊曼陀羅を まさに 正明に 信解し 會得し 體達し

て

壽命不滅 無限に發展すべき 法身『大日蓮』衆人の 崇高

壯嚴なる 遺教を 皇國に 實現するを 努めねばなら

ぬ。

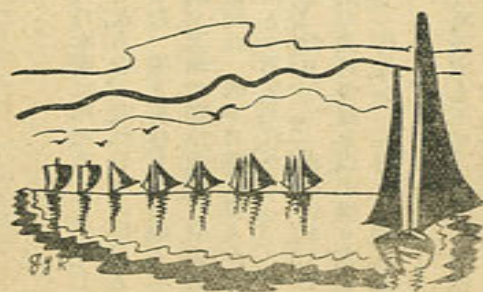
南無妙法蓮華經

去歲 夏秋の交 八嶽彌々高く流水永へなる 信州 佐

久 松原湖畔 湖光山色 幽麗掬すべきの地に草し

今 癸賓十三四五 皇都 天恩舍に於て 更に整記す

(つゞく)



經濟と信仰

上田辰卯

私の題は『經濟と信仰』といふことになつて居ります。實は私は何時もこちらへ参りますと、他に自分の考へて居ることがない爲か、金の勘定の事ばかりしか言はないやうで、あの男は甚だ下品な男だと思はれませうが、現在私の一番肝腎な事はやはり金の勘定であります。それが昔は自分の爲に金が欲しかつたのです、私は可なり貧乏な家に育つた爲に、金は相當苦勞して、金が無ければ何一つ出来ないのだといふことを、子供心に深く感じて居つた爲に、一から十まで金で計算するやうな習慣がついたのであります。それで私も最初は、まア此の位あれば宜からうと思つて居たのがどうやら自分の希望通りになると、またそれでも足りなくなつてモウ少しあつたらと思ひ、それが幸ひどうやら目的を達するやうになつて來た時に、世の中が非常に變つて参りまして、これは自分の爲に金は使ふものではない、金の使ひ道はまた別にあるのだといふ事に氣が付いたのであります。それは昔から定まつて居つたこととせうが、私はそれが解らないで、この頃やつと解つて來たのであります。昔は金さへあれば割合に成功だと言はれて居つたが、今日では金が有つても決して成功と言はれなくなつてしまつた時代になりました。それで私はこちらで皆さんとお目にかゝる度に、一つ事を繰返して申上げたやうな譯ですが、餘り來る度に同じことを申上げてもお厭きになると思ひますから、今日は、一體今日本は金に苦しみ、物に苦しみ、いろ／＼な點で大變苦んで居る、所謂經濟上の苦しみであります。一體この經濟上の苦しみを吾々はどう觀たら宜いのだらう。普通の人が物が足りなくなつて困つ

て居る、或は札が多過ぎて困つて居る、これを普通の人は経済上の苦しみと観るけれども、宗教に志を持つて居る者は、一體何と觀たら宜いのだらうか。普通の人が苦しみと觀るべきものを、等しく苦しみと觀て居たら宜いのだらうかといふ事を、皆さんと共に吟味して見たいと思ふのであります。

今年の豫算はツイこの間の議會を通りましたが、一般豫算が四十八億圓といふ大きな數字で、それにまた臨時軍事費が四十六億圓で、また政府が支拂ふ約束の出來る金が七億幾らかで、合計百一億に近い豫算が出來て居ります。この百億以上の豫算が何で支拂はれるかといふと、大抵これは公債で支拂はれて居る譯であります。高橋大蔵大臣のまだ生きて居られる時分には、國債が百億になると國が潰れさうな事を聞いたのでありますけれども、最近では一年で百億の豫算を組まなければならぬやうになつたのであります。それでその豫算は皆公債で賄ふので、公債はつまり札になるのであります、それだけ札が出て一體物價はどうだらうかといふと錠棒に高い。皆さんも御承知のやうに西一反でも満足に賣つて呉れない、學校へ入るにも洋服を拵へてはいけない、靴もやめて裸足で歩かうではないかといふことになり、何でも唯今ではポストを木に取替へてそれを鐵砲玉にする、或は公園の鐵柵を外して砲車にするのだといふことを聞いて居りますが、この秋頃から左様になるのではないかと言ふ人が多いのであります。つまり戦争でも済んで平和になり、軍備の必要が無くなれば兎も角、戦争が何時終るともなしに斯うやつて對峙して居る以上は、恐らくさういふ極めて經濟的に不幸な状態が暫らされて來るのではないかといふことを心配するのであります。日清戦争日露戦争の時分にはそんなに困らなかつたが、どうしてこんなに困るかといふと、これは外國から物が入らないのが大きな原因です。まア意地の悪い事をして入れないこともありませう、また金を持つて行かなければ賣らないといふ事もあります、その金が日本に思ふやうに無い、私なども金らしい物は皆捜して出したのですが、恐らく皆さんもさうでせうが、金の量は餘りに少いのであります。昨年は二億四五千萬圓の金を掘る豫定でしたが、これも二億圓

に足らないらしい、今年こそは二億五千萬圓を掘るといふのであります、これも果してどうなるか判らない。而も外國に出る金は毎年五億、六億といふ掘つた金を出すのであります、これでは到底やり切れなくなる事は明瞭であります。そこで外國から入る物を加工して外國へ輸出する、例へば棉を買ふならば、内地で木棉を使はないでこれを外國に輸出する、即ち輸出する條件で輸入する、所謂リンク制といふ事をやつたその結果、内地の人は西一反買ふにも骨が折れる。斯ういふ事は當然の結果でありまして、先づ日本がこれから當分苦しまねばならぬ状態が、現在よりモット深刻な状態を経過するのではないかと私は思ふのであります。

一體經濟的に斯うした深刻な状態に在るのは日本が初めてだらうかと言ひますと、御承知のやうに歐洲大戰で獨逸がこれを経験し、また澳地利の國も経験し、或は佛蘭西、英吉利などの交戦各國悉くがこれを経験したのであります。一番骨の折れたのは一方の盟主であつた獨逸で、この獨逸をどうしても叩きつけてしまはなければならぬといふので、聯合國が、今日日本もやられようとして居る經濟封鎖をやりました、完全に陸と海とを取巻いて、食糧品や重要物資の輸入を悉く阻止した譯であります。獨逸は苦しがつて潜水艦で敵の船を打沈めたのであります、兎に角にも英米の大きな海軍力の爲に完全に海を封鎖された爲に、獨逸は殆ど食ふ物が食へない状態になつた。私は實際見た譯ではないが、交戦當時は菓を七割混ぜたパンを買ふ爲に、朝暗い内からおかみさんや娘さんが十町も十五町も繋つて配給を受けたといふ話を聞いて居ます。その經濟上の壓迫を受けた苦しい獨逸は一體どうしたらうか。今日文化の中樞とし、文明の先驅として世界を指導して居る獨逸は、實にこの忍苦の中から生れたのではないかと思ふのであります。

この間日本電工の技師長をやつて居る兒玉といふ人が獨逸から歸つて参り、私もその時招かれたのであります、その時大豆粕で拵へる洋服地を見せて戴きました。それを拵へる特許權を百五十萬圓か買つて來たとかいふ話であります、大豆の粕で拵へる外に牛乳で拵へる方法の二つがあるさうですが、牛乳は日本に餘り無いから、大豆粕で

拵へた服地を見せて戴きました。私の今着て居る洋服も和製で餘り良い物ではありませんが、斯ういふものと比べて少しも違はない。獨逸も羊毛は無し、何も無くなつたその擧句に、何か拵へなければならぬといふので考へ出したのが牛乳で拵へるものと大豆粕で拵へるものと二つ考へ出したのであります。それには赤や黒や青やいろ／＼な服地があつて皆立派に出来て居りました。兒玉博士がその特許権を買つて來られましたから、恐らく日本でも近々滿洲産の大豆粕の服地が出来るだらうと思ふのであります。その時に聞いた話ですが、以前獨逸で一番困つて居たのは金屬類ださうですが、それは殆ど今困つて居らないさうです。最近合併した地方からいろ／＼な金屬が出る、また石炭などでガラスを拵へたり、自動車のボデーなどは皆石炭で造つて居るさうです。私が獨逸へ行つたのは昭和二年で、戦後で可なり苦んで居つた時でありましたが、その時に獨逸の女が斷髪で、スカートの短かいのを穿いて、暖かい時分でしたが靴下を穿かない素足に、汚い靴を穿いた獨逸婦人を何處へ行つても見たのであります。その話をしたら、イヤそれに就て非常に面白い事があるのだ、君が獨逸の街を歩いて見て獨逸の女を見、なか／＼スマートに見えやしなかつたかと言はれましたが、實際色は白いし體格は良いから、斷髪もスカートの短かいのも素足もそんなに醜くないのであります。ところがそれを亞米利加の女が見て、變つて居るナといふので、何も困りもしないのに髪を切り、スカートの短かいのが宜いといふので、困らないのに膝まで切り、だん／＼短かくして股まで見せるやうな短かいスカートを穿くやうになつて、非常に不都合な服装をし始めたのであります。獨逸では、普通のスカートでは布地が勿體ないといふので、腰巻のやうにグット締めて、足の開くのに必要なだけの餘裕しかないスカートを拵へて居つたのですが、それも大變面白いといふので、だん／＼短かくしだん／＼詰めて、膝の思ふやうに開かないやうなものを亞米利加の女などが拵へて喜んだものであります。或る漫畫に、餘りスカートの口が狭くて足が開かないで、電車に上げて貰ふのに男が上から引張つて居るやうな漫畫を見たことがあります。そんな馬鹿な眞似をしたのですが、それを

何時の間にか日本の女が眞似をし出したやうな譯であります。これも何も獨逸が、斷髪にしたら體裁が宜いだらうか、スカートを短かくしたら宜いだらうかといふやうなことを考へてやつた譯ではないので、全く必要に迫られてやつたことが、環境と結びつけて考へて少しも不自然ではなく、また可笑しくもなかつたのであります。それをあり餘る國の者が眞似をやるから可笑しいので、物資の缺乏した獨逸の女がやつて少しも可笑しくないのであります。さういふやうな苦しみが結局今日の獨逸を生んだのではないだらうかと思ふのであります。

先頃も私は聞いたのですが、あれだけ困つて居る獨逸が、つまり持たない國の代表である獨逸が、一體飛行機をどのくらゐ持つて居るかといふと、世界一に澤山持つて居るさうであります。現在では一年に一萬二千臺飛行機が出来るさうであります。亞米利加は遙かに少なくて、半分少し餘ぐらゐの数字らしいのであります。私は獨逸の方が少なくて亞米利加の方が多いのではないかと思つたところが、最近の数字はさういふ風になつて居るさうです。私も遠くへ行く時には、至つて氣の短い方ですから飛行機を利用するのですが、日本では先頃迄は立川から飛行機が出て居りましたが、非常に日本の飛行機は不便で、雨が降ると止めるし、曇つて居ると言つて止めるし、霧が深くても止める、モウ殆どあてにならない。この二月大連へ参りました時にも飛行機で行きましたが、却つて最初から汽車で行つた方が宜いくらゐる非常な不便な程度でありました。ベルリンの飛行場といふのは世界第一の飛行場ださうです。それは何十萬坪といふ飛行場で、その中央には格納庫もあり、またホテルもあつて、飛行場の中へ入るには地下道を自動車で行くといふやうに設備が整つて居て、世界の飛行機がベルリンの飛行場といふものを極樂として居るさうです。この前獨逸の飛行機が日本へ飛んで参つて、不幸にして歸りに臺灣の先きで落ちました。またその前に屢々佛蘭西の飛行機が飛んで來てもどうも日本へはうまく入れない。それを日本は神風の吹く國だから日本へ來られないのだ、斯ういふ馬鹿々々しい事を公然と、而も相當偉い人がそれを信じて威張つて居つたのですが、これをよくきいて見ると非

常に恥辱な事ださうです。外國の飛行機が日本へ来るのが何より恐い、それは何故かと言へば、別に神風の吹くのが恐いのではない、氣流の悪いのが恐いのではない、唯だ日本が航空といふものに對して非常に設備が幼稚だ、殆ど設備が無いので、未開の土地へ行くと同じだ、それが爲に非常に外國の飛行機が日本へ来るのが恐いのださうです。御承知のやうにラチオ・ビーコンなどといふものがあつて、眞暗闇でも目を瞑つて居つても著陸が出来るやうになつて居るのが外國の現状で、霧が深からうが、雨が降らうが、雪が降らうが、そんな事は少しも關係無く飛べることになつて居ります。即ち地上と飛行機との間の連絡がラチオに依つてハッキリ解つて居るので、目を瞑つて居ても此處へ降りようと思へば其處へ降りられる。ところが日本にはそんな設備がない、偶々好い具合にお天氣が良くて、下界がスツカリ見えた時にスツツと降りられるだけである。併し外國の飛行機などは天候などはあまり深く考へないでいゝやうになつてゐるから、日本へ入つて来るとさア眞暗闇で何處へ行つて宜いか判らない、まご／＼して居る内に山に突き當るといふ譯であります。それは世界に最も恥辱である所の設備の不完全なことが原因であるが、それを以て神國なるが故に彼等が日本の領土に來られないのだ、斯ういふ事を公然と言つて居る者があるのですが、それは實に無智蒙昧だと言つて差支ないと思ふのであります。

甚だ餘談に亘りましたけれども、獨逸が左様に大きな文明、これ程偉大な文化を齎したのは一體何が故か、先程申しました通り、それは歐洲大戰の時に世界から壓迫を受けて、糧食といはず軍需品といはず、一切の物を封鎖されて實に苦しみ抜いた、その擧句鬱然として起つて來たところの獨逸精神、世界に反抗して築き上げようとしたところのその精神が、今日の獨逸を生んだのではないかと私は思ふのであります。

昔佛戰爭の時に、佛蘭西は獨逸に負けて、有名なカイゼルがまだ皇太子の時分に佛蘭西のベルサイユの宮殿で敎冠式を擧げた、斯ういふ事を聞いて居りますが、その戰爭に佛蘭西は負けた爲に、五十億フランの償金を取られた。そ

の佛蘭西が戦に負けた爲に、その屈辱を何時かは雪がんとしたその意氣が、佛蘭西の國民に勸諭節約を教へ、また勉勵な佛蘭西國民を生んだと聞いて居ります。さういふ事を考へて見ますと、艱難といふことが、國難といふことが、即ち國民を向上させるもので、國難なければ、國は榮えないのだといふことを私は考へるのであります。「艱難汝を玉にす」といふことは小學校でよく教へることであります。これは個人としてもさうでありますし、國民全體としても無論さうでなくてはならないと思ひます。

私は昔一年ばかり眞珠屋さんに奉公して居りました。養殖眞珠といふものをやつたことがあります。それは御承知の鳥羽でやつて居ります養殖眞珠であります。其處へ行つてやつて居るのを見ると、眞珠貝の口を開けて貝を丸めた玉を貝の中に入れてるのであります。殼と肉との間に挿し込むのであります。さうすると貝は餘計なものが入つて來たから肉に當つて痛い、それで肉から綺麗な分泌物を出して、入れたところの玉を包む譯であります。それがつまり眞珠となるのであります。以前はさういふ方法でやつて居つたのですが、その後だん／＼研究致しました結果肉の中へ石を入れるのです。貝の中へ入れたのは一方だけが眞珠になるだけで、今までの養殖眞珠は半面が光つて居なかつたのです。その後研究の結果肉の中に石を入れると、手数は掛るけれども天然眞珠と少しも變らない眞珠が出来るのであります。これは眞珠にしては痛い話であります。艱難が眞珠貝の中で玉になつて居るのであります。それと同様に、吾々人間の價値も、また國民の價値も、平々坦々たる社會に於て、また平々坦々たる時代に於ては決して磨かれない、國難と云はれる今日の時代は寧ろ望むべき時代であるといふことを考へて宜いのではないかと私は思ひます。吾々は努力をして、努力に依つてこの艱難を突破しよう。そこが國民としても個人としても一番尊い所ではないだらうか。またそれを神様なり、佛様なりが人間に遺して下さつたのではなからうか、斯ういふことを考へるのであります。

谷口といふ人の書いた本に面白い事がありますが、自然といふものは非常に有難い、林檎でも柿でも何でも、人間の手を煩はさないでも季節が来ると美味しい實をならせて呉れて人間に食はせて呉れる。その美味さは甘味といひ、滋養分といひ、如何に人間が工夫してもさういふものは作れない、それを天然はチャンと木にならせて呉れる、非常に親切だ。併しそれ程親切ならば何故稲にしないで御飯にしてならせて呉れないだらうか、一々稲刈つて来て搗いて御飯にして食べるといふことよりも、イキナリ御飯が出来て居たら非常に都合が良いではないか。尙ほ考へれば、棉が出来て、それを紡いで着物にするといふよりも、着物が木にぶら下つて呉れたら非常に宜いではないか。また木を伐つて家を拵へるなどといふけれども、そんな面倒臭い事をしないで、木が自然に家を造つて呉れれば一番都合が良い、どうしてそこまでやつて呉れなからう、神様は不親切ではないかといふやうな考も起るのですが、併しそれはさういふものではないので、神様といふものは人間に創造力と、それを形づくるまでの間の努力との二つを人間に與へて下さつたのである。御飯をなされたのでは人間に何等の努力が要らない、ところが米だから、それをまた炊いて女中が失敗しておかみさんに叱られて勉強するといふやうな形になるのであります。また棉だからこそどうして着物にしたら宜からうかと工夫する、或は手でやつた時代もあるし、蒸氣機関が發明されて産業革命といふやうなものも起つて、機械も發明されるといふ、その餘地を神様が人間に残して下さつたから、人間といふものに無限の發展があるのであります。人間に残されたところの一番尊いものは、一つの艱難に遭遇する時に、自分がそれに突進して、それを開拓して行く、そこに人間としての尊い價值があるのでなからうか、これがなければ恐らく人間といふものは無價値なものではないかと思ひます。

只今お話がありましたけれども、お釋迦様はお生れになつた時から、否それ以前から佛様であつたのであります。お釋迦様はお生れになると直ぐ人間に話をお説きになり、また色々なお慈悲をお示しになることが出来た筈です。それがやはり人間の形を取られて、唯だ人間の形を取られたばかりではないので、求めて困難に遭遇されたのであります。まア歴史上の事實はいろいろありませうけれども、兎に角十九年なり二十年なりで出家されて、さうして六年とか八年とか修行を積まれて、その御修行が並大抵の御修行ではなかつたやうであります。随分飲み食はずでやられた事がある。これは嘘か本當か知りませんが、止息の行とか言つて、一日に一時間とか二時間とか息を止める行があるさうであります。如何にお釋迦様でも息を一時間ならなかつたならば死なれるだらうと思ひますけれども、さういふ随分苦しい行を積まれたさうであります。さういふ行を積まれて始めて正覺を成ぜられたといふ事になつて居りますが、努力の結果生れたところのものだといふことをハツキリ經文の上に書かれて居るのであります。このお釋迦様の仰しやつた言葉の中にも、佛に成るまでの間の年限といふものは、お前達の像もつかない程の長い間の菩薩の行であつたと、そこにいろいろな例も引いてありますが、その菩薩はどんな菩薩かといへば、地球上の一寸の土地でも菩薩の血を流さない土地は無かつた、菩薩の身を捨て給ふ所でない土地は一寸もなかつたと言はれる程、實に吾々人間の想像も出来ないやうな偉大な苦心の結果、佛様と成られたと言つて居るのであります。これは宗教的に言ふのでなく、歴史的にさういふ事が言はれて居るのであります。

日蓮上人も吾々から見ると、モウ子供の時から佛法を體得された偉大な方だといふ風に考へられますけれども、日蓮上人が本當に自分が法華經の行者ではなからうか、斯ういふ事を考へられたのは佐渡であつたのではないか。佐渡で書かれた御書の中に、あの困苦の中で過去を振返つて、或は由井ヶ濱で斬られさうになり、或は伊豆へ島流しにもなりいろ／＼の事をされて佐渡へ流されて、雪の中へ抛り出されて、『今夢の如く寶塔品の意を得たり』といふことを言つて居られます。あれ丈御苦勞をされてまだハツキリして居ない、やつと夢の如く寶塔品の、所謂法華經を持つことは非常に苦しい事だ、法華經の行者であるといふ自覺に立つのは非常に困苦が伴はなければならぬといふことを書

いてあるけれども、それだけの困苦を経て始めて、それも夢に自分が法華經の行者であるのではないかといふ事が解つたといふことを仰しやつてあるのであります。

お釋迦様といひ日蓮上人といひ、吾々の宗教の對象であるさういふ偉大な方々でさへも、それだけの多くの艱苦に打克つ、それだけの多くの忍苦を経なければ成佛しないのであるといふ事を、吾々もシツカリ考へたいと思ふのであります。

私は今年の三月朝鮮の方へ参りました。朝鮮では金山に少し用が有つて、金山の事に就きまして總督府の最高の技術部長に會ひました。他に技師の方々も居られましたが、その時いろ／＼山の話をお聞きしたところ、「上田さん、山といふものは技師に聞いても解りませんよ」と言ふ、私も可笑しな事だと思ひ、吾々素人が技師に聴かないで誰に聴いたら宜いのか、と思つて、「それは可笑しい事ではありませんか、どうして技師に解らないのです?」と言つたら「僕は金山の技師として随分永く勤め、殊に朝鮮にズツト居る、それで技術部長になつて、まア朝鮮では自分が一番よく知つて居るのだらうと思ふけれども、それだから技師には解らないのだ」と言はれる、自分が朝鮮の金山に就ては最高の權威者であるが故に技師には解らないといふことを言ひ切るのです。私もまだ意味が解らない、それです。その人が言ふには、「山といふものは金が出たくなければ出ないものだ、金が有るとか無いとかいふことはそれはスツカリ掘つて見れば解るか知らんが、併し有るべき筈の金の山でも出たくなければ出ないのだ」と言ふ。出したくない人間には出さないと言ふのですから愈々以て私には解らない。私が合點の行かない顔をして居たものですから、事實に就て話して呉れました。金山で有名になつた山ですが、その名は忘れましたが、或る親子で夢を見たといふこととです。それは何處か向ふの方へ行つたら金の山があるから掘れといふ夢でも見たのでありませうが、それで親子が其處へ行つて掘り始めた、さうしていろ／＼苦心に苦心を重ねた結果金が出て來たさうです。さうして人間も殖やし

相當立派な設備もして一通りの金山になつて、總督府も其處から出る金を總督府の豫定表の中に入れる程度までの山になつたのであります。その親子は宗旨は何か知りませんが、非常に信仰の深い人で、親子で毎朝三十分か四十分の間掘る前に必ず佛様を拜んで掘るさうです。それでその山を掘り始める時も、これは自分が掘るのではない、神様や佛様の命令に従つて掘るので、斯ういふ氣持を深く持つて、それを礦夫にもシツカリ言ひつけてやらせたさうであります。可なり立派な山になつたさうです。ところが今度はその山を非常に高い値段で買手がつきまして、それでその親子は他の新山へ行つて掘ることになつてその山を賣つたさうです。ところがその山を買つた人がその翌日から金が少しも出なくなつたさうであります。そこで彼奴はどうも酷い野郎だ、掘り盡した屑を賣つたといふので、その親子を呼んで来て、「君は酷い事をする、少しも出ないではないか」と言はれてその親子は非常に恐縮して、「決してそんな積りで賣つたのではない、自分達はこれだけ立派な山になれば、また自分達は他の山を開発したいと思つて賣つたのだ、それでは一緒に手傳つて掘つて見ませう」といふ譯で、それから自分達の使つて居る礦夫を皆呼んで來て掘つたけれどもどうしても金が出ない。その内に買つた人は金も無くなり、總督府でもそれを非常に心配されたさうです。出なくなつて見れば仕方がない、それで親子も大變氣の毒に思つて、前に買つた値段ぐらゐの非常に高い値段で買戻して、あなたの方は設備だけ損をして呉れ、自分達もさう深山の金はないのだが、併しあるだけの金は出す、あなたに損をさてはいけないから出来るだけ多くの負擔をすと言つて、可なり高い値段で出ない金山を買戻して、今度また自分達がやつて見るとまた金が出て來て、今ではその金山は相當立派な金山で、その親子が現在やつて居るさうであります。金山といふものはさういふもので、これは技術の上で如何とも説明がつかない。それは確に人間がやつて居るのだけれども、寧ろさうなると山が、この持主には出したくない、斯う考へるより外考へやうがないではないか。産金會社や總督府に技術の指導部といふものがあつて、それが方々の金山に産金獎勵の爲に技術家を派遣して

居るが、その技術家が行つても指導の仕様ががない、それは持主に依つて出て来るのだ。斯ういふことを言つて居りますが、實に不思議な事だと思つて私は聽いて來たのであります。

話は違ひますが、これは昨日伺つたことであります。或る大工場でお働きになつて居る方でありますが、その工場の一部分の區域に常に事故が多くて成績がうまく擧らない處がある。それを昨年その方が係長と言ふか、その主任になられたさうですが、その時に、どうも前の先輩達がやつても事故ばかり起る所を、後輩である自分がこれを事故なく仕遂げられようか、なか／＼困難だらう。斯う思はれて、そこで皆を集めて、兎に角自分の力ではいけない、これは神様、佛様の力に依つて事故無く行かうではないかと職工にお話になつた。その結果、昨年の十月から先月の三十一日まで、今までは十日間に二度ぐらゐあつた事故が、只の一度も事故無しに済んだ、それでその人は大變表彰されたといふ話を承りました。

私は金山の話や、今のやうな話を兩方思ひ合せて、實に不思議と言へば不思議だけれども、また考へて見るとさうでなくてはならないとも考へました。私は朝鮮で金山の話を聞いた時に、宿屋に歸つて一晩考へた。一體どういふ譯のものだらう、まさか山が出したり入れたりすることも、人間ならするかも知れないが山はそんな事をすべきものではない、どうも合點が行かない、それと同時にまた、若し自分が金山を引受けてやつた場合に、果して今の親子のやつたやうに、今まで出ないで破産した金山を、今度自分が引受けた時に出るだらうか、それを買つた人がやつて出なくするやうになるのだらうかと考へて、私はその話を聽いて實に恐ろしくなつたのであります。一體どういふ譯のものだらうと考へて見た結果、何も自分が頭腦を捻つて考へないでも、吾々が幾度か教へられた事だつた、お経の中にもその事はあるし、また本多親下あたりから屢々お話を伺つたことだといふことに氣附いたのであります。先程お勤めの時に拜讀致しました壽量品の中にも、ハッキリとその事を書いてあります。「佛を見たてまつらんと

欲して自ら身命を惜まず」——佛を見たてまつるといふことは佛の仕事をする事です、佛を眼で見ようとか、手で觸れようとかいふことではない、それは信仰的態度でせうが、佛の代りに自分が仕事に當ることです。さうしてその意氣、心持を以て身命を惜まず、即ち命も惜しまないでやつた時に一體どうなるか、佛は「衆僧ともに靈鷲山に出づ」といふことを書いてある。御入滅になつた佛様は、お坊さんを大勢伴れて印度の靈鷲山にその時忽然として現れて來られると壽量品に書いてある。吾々は佛の仕事を佛の氣持でその仕事に當る。佛に命令された仕事に自分の全力を盡して身命を惜まず働く、その時に佛様は衆僧と俱に靈鷲山に出て來られると仰しやつてある。而し尙ほもう少し讀みますと、唯だそればかりではない、「餘國に衆生の恭敬し信樂する者があつたならば……」印度の國とは限らない、日本でも、支那でも、西洋でも、何處でも構はない。餘國に衆生がやはり佛の道を行じ佛を信樂する者がある時には、やはり其處に自分も出て來るのだといふことが書いてあります。先程もお話があつた通り、佛様は常に靈鷲山にお居になり、佛様の氣持を以て仕事をする時に、御入滅になつたと思つた佛様は靈鷲山に忽然と現はれ、また自分の心に信じ樂ぶ者がある時には、即ち佛様は「彼の中に於て爲に無上の法を説く」即ち靈鷲山の佛様は自分の處に來て無上の法を説くと仰しやつたのであります。吾々の身は極くつまらないものであるが、併し一心になつて佛の仕事を代つてする時に、靈鷲山の佛様は自分の心に來られて、無上の法を説かれるのでありますから、金が何處にあるか、銀が何處にあるかといふことぐらゐ直ぐ解るので、これは技術の力でなく、信仰の力に依つて得られるのだといふことが、よく解るのではないかと私は思ひます。

これを攷く考へますといけません。信仰の墮落といふものはそこから起るやうにも思ふのであります。技術も駄目だ、科學も駄目だ、何も駄目だ、唯だお題目を唱へて居ると金がスル／＼出て來るかといふと、決してさういふことはありません。さういふ事を若し考へたら、それは宗教の墮落でありまして、決してさうではない、一心に佛を見た

てまつる方が先です、先に呉れれば俺の方でもどうかするといふのは駄目でありまして、それが純他力の信仰で、それは私は嫌ひであります。さうかと言つて純自力の信仰も私は心細いのであります。頼まないでも佛様は救つて呉れるのだといふことになると、黙つて目を瞑つて居ても、酒を飲んで居ても金は出て来ても宜い筈だ。併しそれでは金を出て来ない。さうかと言つて科學の力や自分の力を以てやつても、可なり仕事をやり上げて行くには困難ではないだらうか。やはり一心に佛様を見たてまつらうと欲して命を惜しまず、さうして佛様を恭敬し信樂した時に、佛様が自分の心の中に入つて、彼の爲に法を説いて下さつた時に始めて、私は神人合一した、感應道交した仕事が出来るとではないかと思ふのであります。

甚だ手前勝手な宗教観でありまして、この宗教観が宗教上から吟味してどの程度まであつて居るか知れません。また私も皆さんにお話する程純粹の氣持では無論ありませんが、成べくさういふ氣持になつてこれからの一生を自分の仕事に盡して行きたいといふ考が、最近どうやら纏りがついたやうに思ふのであります。

私の話はこれを以て終ります。

—(完)—

靖國の英靈を讃ふ

本郷常次郎

本四月廿五日は、今回靖國神社に合祀せられたる一萬三百有餘の英靈に對し、畏くも 聖上陛下親しく御拜あらせられた日である。英靈無上の光榮は云はずもがな、遺族等の感激亦ひとしほ深かるべきである。九千萬國民もまた 陛下御親拜の時刻を期して一齊に靖國神社を遙拜したのである。

人生の無常はいまあらためて云ふまでもなく誰でも一度は死ななくてはならない、然もその大部分は疊の上に、病の床に死ぬのであるが、なかには裸死水死毒死等々の變死を遂げあたら定命を早めるものもある。獨り軍人にありては一朝有事の際は 陛下の御爲め國の爲め義は泰山より重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟し、我等蒼生の身代りとしての重き使命を荷ひつゝ、異郷の土に困苦缺乏を忍び惡戰苦闘に耐へ、不幸武運拙く或は敵彈に或は瘴癘に戦死、戦傷病死するのである。其の死や既に崇高何物より尊き獻身的、犠牲的死であつて洵に美むべく讃ふべき死である、然るに尙ほ且つ護國の神として靖國神社に齎き祀らるゝに至つては、人臣の榮譽何事か

これに過ぎんやである。「こんな立派のお宮に祀られて」は獨り遺族のみの感激の叫びにあらすして國民全體の美望の聲である。「靖國さまにお詣りできて、このうへお天子さまを拜めたら私はもうなにも思ひ残すことはない、今日が日に死んでも満足です笑つて死ねます」……子は戰場に陛下の萬歳を唱へ死を見ること歸するが如く逍遙笑つて死に就き、親は故國に餘榮に感激して笑つて死するを得る國民ほど幸福なる國民が、他の國土民族にまたとあるであらうか？これ全く我が國體の世界に冠絶せる所以であつて實に我が國民の忠君愛國の傳統的精神である。この意氣百萬の敵軍を以て紛碎すべし、あゝこの氣魄六合に磅礴して四海を光被せずんば止まず。

誰か云ふ「天業恢弘、光宅天下」は一片の空辭と。

× × ×

日蓮聖人宣はく

「人身は受け難し爪上の土、人身は持難し草の上の露、百二十まで持て名をくだして死せんよりは、生きて一日なり

とも名を擧げん事こそ大切なれ」(崇峻天皇御書)

君の御盾となりて芳名を竹帛に垂る男子の本懐豈にこれに過ぎんや、祖先以て冥すべく子々孫々永く傳へて以て皇國を護らん。

聖人又曰はく、

「天の三光に身を温め、地の五穀に神を養ふこと、皆是れ國王の恩なり」(四恩抄)

吾人の安臥して其の日を送る所以の者は偏に君恩の賜である。こゝに千載一遇の國難に際會し一死以て君國に報ずるを得、聊か以て皇恩の萬一に報む得たるを喜ぶべきである。「一旦緩急あらば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼する」は我が大日本帝國臣民の本分である。況んや興亞の大業の礎石となるの天職を全ふしたるに於ておや、神人共に讚美して止まざる所である。

左に 明治天皇の御製數首を掲げて護國の英靈に手向けよう。

やすくの社にいつく鏡こそ、

大和心の光なりけれ。

もみち葉の赤き心を靖國の、

神のみたまもめでし見るらむ。

たゝかひに身をすつる人多きかな、

老ひたる親を家にのこして。

叡山の聖蹟

日蓮といへば、世間では辻説法姿を想像したり、執權を叱咤して得意昂然とし、目怒らし、腕まくりをした荒法師の觀を懐いて、四箇格言や立正安國論が代表的に見られて居る。けれ共それが果して眞の末法の大導師たるべき態度であつたらうか。一體さういふことが何處から出て來るのだらうか。「日蓮は去る建長五年四月二十八日より今年弘安三年十二月に至るまで、二十八年が間又他事なし、只南無妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり、此即ち母が赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり」と晩年に仰せられて居る。

法華經は拆伏だ破權門理だといふが、四安樂の行なくして不輕菩薩はあるまい。「一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて候なり、不輕菩薩の人を敬しはいかなる事ぞ、教主釋尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」日蓮は末法の常不輕菩薩だと申された其の基

五四

みなし子にかたりきかせよ國のため、

命すてにし親のいさをを。

世と共に語りつたへよ國の爲め、

命を捨てし人のいさをを。

(昭和一四・四・廿五)

夫レ忠ハ身ニ興リ、家ニ著ハレ、國ニ成ル。其ノ行一ナリ。是ノ故ニ其ノ身ヲ一ニスルハ忠ノ始ナリ。其ノ家ヲ一ニスルハ忠ノ中ナリ。其ノ國ヲ一ニスルハ忠ノ終ナリ。身一ナル時ハ則チ百禄至ル。家一ナルトキハ則チ六親和ス。國一ナルトキハ則チ萬人理マル。書ニ云ク、惟レ精惟一ニシテ、允ニ厥ノ中ヲ執レト。

— 忠 經 —

磯部満事

礎は、獨り先天的の徳性ばかりでなく、斷へざる平素修養努力が預つて力あることだと思ふ。現に本多上人を見て、晩年病床に横たはりつゝしかも片時も大藏經は枕邊から離されず、晝でも夜中でも隨時手にされて居た、又新刊の目ぼしいものは必ず取寄せて一覽せられた。而して「今の若い者は本を見ません、駄目ですよ」といはれたが如何に天才的であつても、放任すれば凡愚に等しく、如何に驚鈍でも鞭うてば向上するであらう。「夫れ懈怠は衆くの行の累なり、家にありて懈怠なれば衣食も供らず、産業も擧らず、出家して懈怠なれば生死の苦を出離する能はず、一切の事は皆精進によりて興起す」と釋尊は仰せられた。

日蓮聖人を拜する上には、是非蓮長としての修學時代の様子が窺ひたい、せめてその足跡でも嗅いでといふことから一度叡山に登つて見たいがと時を待つて居た。幸にも待てば甘露の日和とやら、去る四月廿八日池田道兄

一行と京都に落ち合った。

お互は初めての登山で、どう行くべきかも知らない、幸ひ山麓松ヶ崎涌泉寺の深見上人に願路を伺つた。夫に依ると京都驛前から市電銀閣寺行に乗り、叡電前下車、次に叡山電鐵に乗換へ出町柳から八瀬終點迄十二三分で運ばれ、次に西塔橋から四明間は約十分、叡山ケーブルの便を利用し、そこから少し歩いて高祖谷より延暦寺間には空中ケーブルでスーッと渡る。延暦寺驛から右すれば東塔の大講堂や中堂等一般の比較参りとなるが、私共は其處から峰傳ひに四十丁ばかり先の横川中堂を経て、その奥敷丁、定光院に詣る順序であつた。

一行は、池田道兄と、其御兩親、堀江國子嬢、久君及び種村宜雄班長と自分の七人で、出町柳を出発したのが十時頃で、延暦寺驛着は途中若干待合の時間もあつた爲めお晝少し前であつた。附近には食事をとる適當の茶屋もないので、一つは少しでも早く目的地に辿り着きたい希望から、八重櫻満開の美を賞でつ、青葉嫩葉の黄金色に照され、何處かで法華經と啼く音の如何にも仙境否淨土の思がして悦び勇んで行く程に、約敷丁も過ぎたか、不圖前方に苔蒸した一椽、これぞ蓮長時代より約四百年前、承和元年、圓澄和尚草創の釋迦堂である。一名

轉法輪堂といふ。今靈山第一の印象が、この釋迦堂とは何といふ有難いことぞ、屋根棟高く菊花の御紋章が燦然と輝いて居た。一同は感激の唱題に陶躍る。

老杉古松鬱蒼といひたいが、その深味のないのは、天文龜兩度兵焚の爲めであらうか、併し春陽快晴の慈光をあびて、風もない静かな山道を辿る、これは昔からの道であつたらうか、蓮長房も幾度か踏まれた土の跡であらうか、さうあつてほしいが等と萬感交々到るの想で降つては登り、登つては又降り、幾度となくこれを繰返しつつ石ころの細道をテタツた。人通りのない全く木樵も居ないそれで少しも淋しさを感じない山道、春の山のせい、同行の多い爲めか。身にも心にも積る都塵を打拂つて、深い息を思ふ存分に吸ひつゝ、七歩二息の行進で迂る様に行く。十五六丁も来た頃右手に掌の大きな平地がある、谷を越え峰を越えて遙かに琵琶湖を眺めた気分は得も言はれない絶景である、新緑に萌へ立つ全山、七百年昔の蓮長房の上にも、かゝる環境が大きな利戟を與へなかつたかなどと思ひ廻らしつゝ、空腹に疲れた足を引する親御達のお姿を前にして、靜かに法鼓を撃ち唱題しつ進んだ。谷間に響く題目、老篤も和唱する嬉しさ、皆元氣一度に發利として行先を急ぐ。眼前に一つの希望

が輝いてゐるからこそ、すき腹のことも、足の痛みも苦にならぬ、人生亦斯の通りかと思ふ。二時頃横川中堂に着いたが、素通りして、奥の急坂を六丁ばかり右曲左折遂に華方谷あこがれの定光院に腰をおろした。此處は意外にも新しい建物や祖師の銅像にハット胸うたれた。

此日は期せずして、蓮長房が永い間研鑽の結果、故郷房州清澄山の小高い森に立つて、堂々天下に南無妙法蓮華經、々々々々々々と十遍ばかり師子吼された建長五年四月廿八日立教の聖日に相當した事は、特に甚深の感激を覚え、一同恭しく御寶前に讀經唱題し大恩報謝の九牛一毛に擬した次第であつた。

住職土井啓全師の御厚意で、白い御飯に山椒の香もゆかしい茜の汁と、焼海苔に、舌敷をうつて近來にないおいしい晝飯を戴き、全く養生の思ひがした。僅かに定刻より三時間ばかりの差ですら空腹は堪へ難い、況んやそれが食のない貧しい人々の心持ちはどうであらうか。

ひもじさと戀しさとに比ぶれば

恥しながらひもじさが先き

といふ程辛いものである。志士雲井龍雄氏が

斯身飢斯兒不_レ肯 斯兒不_レ棄斯身飢

捨是耶不_レ捨非耶 人間恩愛新心迷

哀愛不_レ禁無情淚

こゝに釋尊の教の有難さがあるのである『皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂、及び涅槃の樂を得せしむ』と法華經に示され、日蓮聖人は、孤島佐渡の雪中で『日本國第一に富める者は日蓮なるべし』と仰せられ、宗教法悦の満足が能く現はれて居る。武士は喰はねど高楊子』とは相當の距離があることを思ふ。

さて蓮長房の叡山入りは、叡山の四俊と呼ばれた天台座主信尊僧正の弟子尊海に、誰れの紹介といふでもなく、寧ろ佛天の御計ひであらうか、鎌倉で交を結んで遂に同道することになり、廿一歳の暮に登山し、許されて東塔の圓頓坊に住居し、晝夜の別もなく聖經に眼を曝し、釋疏を手に書き、愈々傳教大師の法水、三代目の慈覺四代の智證に至つて全く濁つてしまつた事を確められた。『慈覺、智證と日蓮とが、傳教大師の御事を不審申すは、親に値ふての年あらそひ、日天に値ひ奉りての目くらべにては候へども、慈覺、智證の御かたふどをせさせ給はん人々は、分明なる證文をかまへさせ給ふべし、……政ひ慈覺、傳教大師に値ひ奉りて、習ひ傳へたりとも、智證、義眞和尚に口決せりといふとも、傳教義眞の

正文に相違せば、豈に不審を加へざらん」との自信から、三百餘年、華嚴三密の義理に醉へる一山三千の大家をして、その心膽を寒からしめたと言はれて居る。かゝる噂が遂に洛中に迄擴大し、ある時京都五條小路の書店天王寺屋淨本が、圓頓坊を訪ねて以來、幾多の外護を與へるやうになつた。かの臨濟宗の圓爾和尚、仁治二年宋から歸朝した禪僧だが、これに紹介したのも淨本であつた。此の圓爾が後年東福寺建立の時、大木を寄進されたのが『日蓮柱』として有名である、以て蓮長房の友情を物語るよい證據と思ふ。

蓮長房の精進は早くも叡山の三藏一通りは頂戴した譯で、此の上は、更に進んで近畿の高僧碩徳の門を叩いて、實際上活きた研鑽を積まうと決心して、東奔西走寧日なしであつた。その重なるものを擧げると、廿五歳、宋の道隆和尚を泉涌寺を訪ね、如來禪の種典を領し、又三井寺に眞言密部を修め、翌年は天王寺屋淨本の家を足場として京洛に法を求め、次の年は奈良の古都、元興寺の學寮に入つて、三論、俱舍を究め、轉じて興福寺に到り法相宗を學び、次に東大寺に華嚴を修めた。此秋叡山の自坊へ歸る路すがら伴になつたのがアノ江川太郎左衛門吉久氏であつたといふ。

竺に於て東北に縁有とは豈日本國に非らずや。遊式の筆に云く、始め西より傳ふ猶月の生ずるがごとし、今復東より返る、猶ほ日の昇るが如し云云。正徳二千年には西より東に流る、暮月の西空より始むるが如し、末法五百年には東より西に入る、朝日の東天より出るに似たり。

—曾谷抄—

蓮長の大願將に成らうとするその最後の研究として、東寺と仁和寺の學寮に眞言の秘法を修めた。

建長四年 三十一歳叡山に歸り、今度は定光院に入り、更に深く天台の教義を研鑽しつ思索をこらして餘す處もなく、最早其の睿智の何人と雖も及ぶ者がなく、さうなれば彌々自分の使命の重大さを痛感した蓮長房は、末法に入つて二百年、釋尊の切實な救済の力をどう光顯するかが、佛徒としての大眼目であらねばならぬ、天台の一心三觀も、一念三千も共に不思議法で容易に及ぶべきではないが、併し天台大師の思慮の及ぶ所の法門である、且つ又時代から見ても一區劃を越へた像法の時、早くいへば昨年の曆のやうに、末法今の時には功德は得られない、末法は妙法蓮華經の受持口唱でなければどうしても救はれないのである、妙法蓮華經といふことは、世間では經文と思ふだらうがさうではない、釋尊一代の肝心、

其後大阪の四天王寺や、南都の唐招提寺の律宗、高野山、大和法隆寺、磯長叡福寺等に各宗の根底を究め盡し、其間『戒法門』『色心二法鈔』『師子頰王鈔』『堯舜禹王鈔』『諸願成就鈔』等の著述がある。

建長三年、三十歳、淨本を傾はして儒道を大學三耶能本に學んだ。それから更にこの能本の紹介で、冷泉大納言爲家に就て、熱心な教導の許に、神道を大成された。そこには在來の皇學者の想ひ至らぬ新しい方面に數多の發見もあり、爰に釋然として皇國の大光明を發輝するは實に法華經である、皇國の大精神と一致融合して全人類に自覺を與へるものは寔に法華經である。法華經は日本國に由つて轉き、日本の生靈は法華經に由つて救済される、日本國と法華經、法國冥合の微妙甚深の關係を會得した。定めし蓮長房は、其血の湧き、肉の躍るを禁じ得なかつたであらう。

肇公の翻經の記に云く、大師須梨耶蘇摩、左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて授與して云く「佛日西に入て遺耀將に東に及ばんとす、此經與東北に縁有り、汝慎て傳弘せよ云々」予此記文を拜見して兩眼瀧の如く一身悦を徧くす。此經與東北に縁有り云云。西天の月支國は未申の方、東方の日本國は丑寅の方也、天

法華經の所詮である、だから妙法蓮華經のお題目を離れて、法華經々々々といつても、それは猿をはなれてその肝を得やうとした莫迦な龜の如きものであり、山林を捨て、果實を大海の邊にあざらんとする猿である。『妙法蓮華經』と申は、法華經の中の肝心、人中のたましひの如し」とも又「法華經一部の功德は、只妙法の五字の内に籠れり」なんだから、今こそ惜も俗も、男も女も、貴も賤も他事を捨てて、本佛釋尊の大慈悲によるその因行果徳の如意珠を、妙法蓮華經の五字につままれて吾等の爲めに遣しおかれたのだから有難く頂戴すべきであるとの金剛信を、過去二十年に亘る徹底した苦修練行から握んで、歡喜滿面に溢れ先づ故郷へと志された。開祖傳教大師の再來かと大に期待して居た叡山の大家は驚いて引留めやうとした、心ない小禽も草木に至る迄別れを惜む中を、師子の起つた様に猛然と下山されたのは、其の年も漸く暮れやうとする十二月であつた。

足掛十一年の叡山修學と一口に行つても、自坊に起居された月日はさう多くはない、常に東奔西走、血みどろの求法態度であつた。『此度いかにもして、佛種をも植へ、生死を離るゝ身と成らんと思ひて候ひし程に、……一の願を發す、日本國に渡れる處の佛の經並に菩薩の論

と、人師の釋を習ひ見候はゞや、又俱舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、眞言宗、法華天台宗と申す宗共あまた有りとくく上に、禪宗・淨土宗と申す宗も候なり、此等の宗々枝葉までこまかに習はずとも、所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、随分にはしり廻り、十二、十六の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉・京・叡山・國城寺・高野・天王寺等の國々寺々、あらあら習ひ回り候ひし程に、一の不思議あり、我等がはかなき心に推するに、佛法は唯一味なるべし、いづれも心に入れて習ひ願はゞ、生死を離るべしとこそ思ひて候に、佛法の中に入りて悪く習ひ候ひぬれば、誹法と申す大なる穴に墮ち入りて、十惡、五逆と申して、日々夜々に殺生・偷盜・邪淫・妄語等ををかす人よりも、五逆罪と申して父母等を殺す惡人よりも、……つよく地獄に墮ちて、阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候ひけるぞ」と、晩年阿闍梨法尼に教へられたこの一節に、自身の修行の模様をアツサリと記し、それにつけて誹法罪の恐ろしい事が述べられてゐる。誹法の罪は法華經譬喻品や勸發品を拜すれば一層よく會得されるであらう。

さて蓮長房二十年研學の十宗大略を窺ふに、俱舍・成實・律の三宗は、阿含小乘經に依憑し六道の因果を明

かすが、四聖にまで達せない、隨つて佛性論にも及ばないから成佛は思ひも據らぬ。

三論宗は、百論、中論、十二門論、大論、般若經等の經論に依つて吉藏大師が立てたもので、印度から天台宗以前に支那に渡つたが、八界迄はたてるが、未だ十界を明してない。

法相宗は、方等部の上生經、下生經、成佛經、深密經、解深密經、瑜伽論、唯識論、等の經論に依り、玄奘三藏、慈恩法師等が立てた宗である、天台大師已後唐の時代に渡來した。此宗は八界を立つて、五性各別を立張し、無情有情の焚燒の開提は永く成佛せずといふのである。

華嚴宗は、智儼、法藏、澄觀等の大師が、華嚴經に依つて立てた宗で、釋尊を下げて盧舍那佛を本尊と仰いでゐる。

眞言宗は、素と善無畏三藏が、大日經、金剛頂經、蘇悉地經等によつて立てたもので、大日如來が本尊と定められた。華嚴・眞言の二宗は、共に十界を立つるが、互具は説いてない。

念佛宗は、方等部の無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經等に據り、至心に阿彌陀佛に歸命して、教主釋迦牟尼世

尊を經じた宗旨である。

禪宗は、釋迦牟尼佛より大迦葉に傳へられ、達磨大師迄の如來禪と、それから後の祖師禪は、教外別傳、不立文字、直指人心見性成佛といふが、又楞伽經、首楞嚴經、金剛般若經等に據る教禪もある。是等は法華已前の權教の説である。

天台宗は、釋尊滅後一千五百年、支那に智者大師出現して、釋尊御一代經の意を江河として法華經を大海にたとへ、十方界の佛法の露一滴も漏さず妙法蓮華經の大海に入れ、南北十師の邪義を破失して正義を立て、晩年止觀十卷を註して支那の小釋迦と稱へられた天台大師の創立である。傳教大師は其後三百年、日本に出て分裂せる六宗の學者共を説伏し、七大寺を末寺として、比叡の山に圓頓の大乗別受戒を建てられた。即ち七大寺の碩徳十四人が承伏の謝表に、『七箇の大事、六宗の學匠乃至初めて至極を悟る』等、又『聖徳の弘化より以降、今に二百餘年の間、講ずる所の經論其數多し。彼此理を争つて、其疑ひ未だ解けず、而も此の最妙の圓宗、猶ほ未だ闡揚せず』等、又『善講等牽かれて休運に逢うて乃ち奇詞を聞す、深期に非ざるよりは、何ぞ聖世に託せん哉』等と、述べて延暦二十一年正月十九日、畏くも 桓武

天皇の御前で立派に正邪の解決はついで、日本佛教の統一が出来た、所謂法定まつて、國清むに至つた次第であつた。最早何等の問題も残されてゐなかつたのにも拘らず、三代目の慈覺に到つて師子身中の蟲を生じ、安然、慧心と共に叡山の三蟲と痛憤せざるを得なかつた蓮長房の胸中は、定めしその哀情禁じ難いものあるは當然と思ふ。又御佛の御計ひ敷。

至誠の蓮長房、觀念の牀に夢さめて、一心三觀の月澄む定光院の淨舍も、あたら兵焚の爲め往昔の影も留めず、現在蓮長房の遺物と稱すべき何物もない。唯一つ坊の向ひ山の崖上に、高さ五尺計りの岩があつて、夫に洞を作り自筆の細字法華經一部を安置され、其處に一基の寶塔があつたさうだが、今は京都妙覺寺に保存せられてゐるとのことである。土井師の話には、昔の定光院はその庭園の所あたりでしやうとの事であつた。何等の記念さるべき遺物はなくとも、此の土地こそ蓮長房、最後の磨きをかけられたかの智者大師の天台山にも比すべきなつかしい御遺跡だと思へば、寂まりかへつた谷間、其處此所の一草一木も、やがては吹く風も慕しい、條々と寛に傳ふ清水も口にしたたい……。

織田信長に焼かれた叡山、間もなく天正年間に亮榮和

尙此處を再興し、元祿になつて亮憲和尙、本園寺學頭眞如院、玉龍院の二師と共に塔廟の再建を計り、文政に圓海和尚滿願寺の日進上人と共に改築を成し、宗祖五百五十遠忌の供養を營み、近くは明治二十年、行欽僧正、並に本園寺日脩上人、京洛の信徒と共に坊舎の再建を遂げ、其後昭和九年十一月本堂の新築竣工を見たのであつた。大聖人の銅像は、大正十二年、宗祖御生誕七百年の記念事業として建設したといふ。

俗塵から離れたこの靈場に、筵でも擴げて心ゆく迄御書を拜し、聲を限りに唱題したいのは山々であるが、さうもならず思ひ切つて三時過、遂にあこがれの聖境を辭して道を坂本に擇つた。それはモー叡山中堂行には遅いから、……途中横川中堂に敬意を表し、緩い下り坂を、左や右に流れる谷川の繪も及ばぬ風情に添ふて、見上ぐる兩側の幽遠たる木立の潑刺と照る嫩葉を眺め、細道に悠々と伸び出した山吹の満開、賑やせんまいの拳を固めたやうな姿、大自然の美にうたれつゝ、お題目も聲すれば、雑談も交へられ下りに下つた。

種村班長は、北支でこんな所があれば忽ち匪賊の襲來ですと、それにつけても日本は有難いです、皇恩無窮ですと添み出る感激もさこそと首肯ける。一同足の運びも

軽く、五時頃坂本の日吉神社に詣でた。昔傳教大師が山王一實神道を唱へ、漸次延暦寺の僧徒に依つて神興振といふやうなことも出来し、後には僧兵の横行となつて宮闕に迫るやうなこともあつたのは、こゝかと思ふと感慨無量である。

日吉神社から少し行くと、生源寺、そこに傳教大師御生誕の産水の井戸がある、石筒は豊臣秀吉の寄進と記されて居る、お題目を三唱して出れば直ぐ京坂大津線の坂本驛である。

坂本驛から乗車し、濱大津で乗換へ三條に歸着したのは早や六時半、暮色蒼然として鴨川の水は靜かに流れてゐた。



園費誌料維持費及寄附金領收 (自四月二十二日 至五月二十一日)

一金 參 圓 也	甲 府	五味 季 六 殿
一金 貳 圓 五 拾 錢 也	福 岡 縣	大 石 千 尋 殿
一金 貳 圓 五 拾 錢 也	相 州	中 村 銀 藏 殿
一金 壹 圓 貳 拾 錢 也	新 潟 縣	帶 重 能 殿
一金 壹 圓 貳 拾 錢 也	千 葉 縣	加 瀬 佐 太 郎 殿
一金 貳 拾 圓 也	東 京	大 下 正 人 殿
一金 七 拾 圓 也	同	何 某 殿
一金 參 拾 圓 也	中 支	岩 瀧 經 夫 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	東 京	釋 眞 誓 殿
一金 六 圓 也	明 石	加 藤 曠 之 助 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	同	梶 川 福 太 郎 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	神 戶	林 重 太 郎 殿
一金 五 圓 也	東 京	大 原 重 雄 殿
一金 貳 圓 五 拾 錢 也	千 葉 縣	花 島 喜 三 郎 殿
一金 貳 圓 五 拾 錢 也	東 京	榎 本 正 殿
一金 壹 圓 貳 拾 錢 也	同	榎 本 ま さ 子 殿
一金 壹 圓 貳 拾 錢 也	身 延	廣 野 長 太 郎 殿

一金 貳 圓 五 拾 錢 也	横 濱	和 田 皆 吉 殿
一金 參 圓 也	東 京	宇 野 博 順 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	同	藤 間 末 子 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	同	大 多 和 太 郎 殿
一金 六 拾 五 圓 也	福 島	中 村 美 津 殿
一金 五 圓 四 拾 錢 也	京 城	淺 川 み ね 殿
一金 四 圓 五 拾 錢 也	横 濱	青 柳 榮 一 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	神 戶	廣 木 津 喜 子 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	新 潟 縣	本 間 卯 作 殿
一金 五 圓 也	東 京	藤 崎 勘 三 郎 殿
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也	富 山	開 爲 太 郎 殿

右難有領收入帳仕候也(以是代領收證)

財團法人 統一園會計

(記) (事)

本部 團報

立教會 四月下旬は立正大師六百八十七年前故郷清澄の小高
い森で、さし昇る朝日に對ひ自行化他に亘る唱題を遊ばした
最も記念すべき時であること、今更事新しく書き立つ迄もな
い。本部に於ては時局に際して一入正しい宗教の信仰を大家
に與へ、聊かでも國恩に報すべきものと、かゝる機會大に法
鼓を撃つた。午後二時、定刻和賀師を中心に法要を虔修し終
つて直ちに講演に入つた。

去る建長五年四月二十八日、安房國長狹郡の内東條の
郷、今は郡なり、天照大神の御くりや、右大將軍の立て
始め給ひし日本第二のみくりや、今は日本第一なり、此郡
の内清澄寺と申す寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして、午
の時に此法門申しはじめて今に二十七年弘安二年なり。
と、後年記しおかれて居る。磯部常任理事より諄々として、
立正大師の大教開闢の深義を明され、吾等の覺悟に資し、次
で種村宣撫班長は「北支の宣撫を語る」と題して、自ら死線
を超えた幾多の貴き體驗を順序よく講述し、いかに宣撫工作
の肝要であり、愉快なるものかを耳新らしく知らされた。日

は、其祖先の諸靈位も照覽されてゐることであり、一層意義
深い追孝の善根と思ふ。五月十八日の吉日を卜して同心會幹
事吉田敏夫君は、安澤フキ嬢と、池田會長御夫妻の媒約に依
り、本部御實前に於て、磯部先生式長の許に極めて莊嚴なる
大典が営まれ、参列の各位にも多大の感激が與へられたこと
は寔に御同慶に堪えない。希くは兩家の益々信心倍増し家運
興隆、世出双益を念願致す次第である。

福島支部報

高商五月十二日 磯部先生の御來臨を仰ぎ、生徒集會所に於
て鑽仰會の例會を催す。吉松先生並に支部の有志隨喜御臨
席。始めに一同動行、終つて日蓮聖人の苦修練行の法話を承
る。立正大師のあの雄渾なる御奮闘の奥には、生年十二歳よ
り三十二に亘る二十年の熱烈深刻な求道の大精進を以て佛法
の正統を究めんと鎌倉、比叡、奈良、高野等々に遊び、一方
孔孟の道を研め、又我が惟神の道にも精通し、爰に凜然と起
つて建長五年四月廿八日、清澄山頂の立教となつたのだと話
された。源遠ければ流れ長しである。

大町同夜 中村様方にて支部座談會を開き、毎日讀誦せる法
華經述門の中心たる方便品長行の講話を戴き、法悦に滿され
散會した。時に十時。

橋本家改宗 飯野の橋本家に於ては、先年來愛兒、辰居、美

支親善の金鐘は實にこの宣撫班にあることを思ひ、その想像
以上の苦難、菩薩行に敬服合掌する。最後和賀師の簡結なる
閉會の辭で、午後五時半頃名残惜しくも散會。

御法難會 五月十二日は、立正大師に就て三つの記念すべき
日である。即ち天福元年には十二歳で清澄の山に登られ、弘
長元年には伊豆伊東の流罪、文永十一年には佐渡より歸ら
れ、幕府第三誅戮も空しと知つて身延に發足された。かゝる
意義深い聖日を追憶して、中旬の日曜日午後二時から、同師
會有志に依り教化講演會が開催されて、始めに磯部常任理事
の挨拶あつて後、本郷日常師の立正安國と迫害に就ての熱辯
を耳にし、次で山口智光師の川奈體験談等興味深い法話が進
められ、五時過ぎ閉會後も有志の懇談に華が咲いた。

御書講座 御遺文撰時鈔の讀講が、毎週火曜日の晩、小林一
郎先生に依つて催されて居る、五大部の中でもこの御書は、
他に比して拜讀する量が少くないのではないかを嘆ずる者
である。今日の時こそ奮つて來聽すべきと思ふ。
朝動行會 毎早朝本部に於て勤行が營まれて居るが、特に日
曜日と月曜日の朝は同心會の有志多數参列、熱誠篤めた修法
に、各位の信仰が目立つて増進されてゐることは、全く稀有
の現象ではあるまいか。切にその益々精進を祈つて止まぬ。
吉田家結婚式 神前結婚の多い昨今、特に本佛釋迦牟尼世尊
の御前に於て、人生の大事たる結婚の式典を舉行すること

芳の兩君、至孝奉仕より一家打掃つて本化の妙信に浴されつ
つあつたが、去る四月二十三日昔からの菩提寺に父子參詣し
改宗の事を率直に申立てられた。住職もその至誠に感動して
忽ち之に贊助し、將來大に顯本法華の信仰増進を囑望し、茲
に極めて圓滿の解決を見、同家祖先追孝の美譽を致されたこ
とは、近來特に有難い殊報として大書すべきである。

普通世間の人は、道理の上では百も二百も承知しつゝ、情
ていざとなれば逡巡して斷行され難い改宗を、思ひ切つて敢
然と遂行された美談は、永く斯界の鑒鏡たるべきを思ふて歡
喜に堪えない。法華經卷第八、妙莊嚴王品を身に讀まれた橋
本父子の爲め、心から祝願申上げる、南無妙法蓮華經。

昭和十四年五月二十七日 印刷納本
昭和十四年六月一日 發行

(第五百三十一號)

不許複製
編輯者 東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行人 東京市四谷區内藤町一
印刷所 東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島 電話牛込六九六六番
東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法 統
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

佛敎の根本と其の應用(其十二)……………	本	多	日	生
開目 鈔 講 話(第廿九講)……………	小	林	一	郎
近 詠 數 首……………	大	八	義	
學徒に賜りたる勅語を拜して……………	河	合	陟	明
延 山 紀 行……………	磯	部	滿	事
寸 感 片 々……………	笹	木	欣	爾
時局認識徹底方策……………				
記 事……………				
○本部團報 ○福島支部報……………	本	多	日	生
○團費誌料寄附金及維持費領收……………				
大藏經要義續篇(其十五)……………				

號月七年四十四第

14/10.22.3

法財人團統
團發行